平成 26 年度

順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科　修士論文

大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程

氏　名　　澁澤　秀徳

論文指導教員　濱野　光之

合格年月日　平成 27 年　2　月　23　日

論文審査員　主査　加藤　実

副査　町田　萌

副査　濱野　光之

目次

第 1 章　緒言……1
第 2 章　先行研究……3
第 1 節　指導行動(Coaching Behavior)とその影響に関する研究……3
(1)　指導行動の理論:Horn のワーキングモデル……3
(2)　指導行動に関する研究……5
第 2 節　スポーツ指導者の指導哲学とその形成過程に関する研究……6
第 3 章　目的……10
第 4 章　方法……11
第 1 節　対象者の選定基準……11
第 2 節　研究の手続き……12
(1)　質的インタビュー……12
(2)　倫理的配慮……13
第 3 節　データ分析……13
第 4 節　信頼性の検証……14
(1)　研究者によるトライアンギュレーション……14
(2)　メンバーチェックによる信頼性・妥当性の検証……14
第 5 章　結果……15
第 1 節　指導哲学……17
(1)　指導への取り組み……17
(2)　指導の観点……19
(3)　指導者として必要なスキルと特徴……21
(4)　選手として必要なスキルと特徴……23
(5)　選手との関わり方……24
(6)　チームの在り方……26
(7)　戦術・戦略……27
第 2 節　指導哲学の形成過程……29
(1)　モデル……31
(2)　経験……33
(3)　個人要因……37

(4)　環境要因……38
第 3 節　指導哲学と形成過程……39
第 6 章　考察……41
第 1 節　研究の意義……41
第 2 節　現場への提言……43
第 3 節　研究の限界と今後の課題……44
第 7 章　結論……46
引用・参考文献……47
謝辞……53
英文要約……54
添付資料 A　研究トピックの関心や経緯と背景に関する記述……55
添付資料 B　インタビューガイド……58
添付資料 C　コンタクトサマリー……61

図・表リスト

図 1　Horn のワーキングモデル(A working model of coaching effectiveness).....4
図 2　指導のマップ.....16
図 3　形成過程のマップ.....30
図 4　指導哲学と形成過程の関係図.....40
表 1　研究対象者のプロフィール.....11

第1章　緒言

東京オリンピック・パラリンピック2020年の開催に向け、日本のバスケットボールの競技力向上は大きな課題とされている[40]。2014年第17回アジアバスケットボール競技大会では、男子・女子日本代表チームは、共に3位に入賞した[44]。男子チームにおいては、20年ぶりの3位入賞であった[44]。しかしながら、国際バスケットボール連盟(FIBA: International Basketball Federation)が提示する世界ランキングでは、男子は46位(2014年9月)、女子は15位(2014年10月)と、世界の強豪国との差が埋まっているとは言い難い[22]。

公益財団法人日本バスケットボール協会(JBA: Japan Basketball Association)は、中長期強化計画を立案し、国際競技力向上の取り組みとして、日本代表チームの強化、底辺の拡充と選手の発掘・育成、指導者の育成の3つを掲げている[44]。具体的な取り組みとしては、エンデバー制度やコーチライセンス制度を導入し、日本各地から優秀な選手を発掘・強化・育成するための施策やコーチライセンス取得の義務化やポイント制による定期的な講習会への参加などを展開している[44]。しかしながら、JBAの指導者育成システムは、基本カリキュラムやプログラム内容の更なる質の向上が望まれている[33][34]。

内山[59]は、競技力を「身体性、知性、感性の3つの能力から成る複合的構成体」と定義しており、指導者は競技力を向上させるための「有効な触媒」(catalyst)[23]であると位置付け、指導者の育成が競技力向上に不可欠である点を強調している[59]。これまで、バスケットボールの競技力向上における研究としては、ゲーム分析の研究[66]、オフェンスやディフェンス戦術に関する研究[46][47]やリバウンドに関する研究[29]など、バスケットボールの戦術や技術の指導方法に関する研究は盛んに行われてきた[29][32][46][47][48][66]。スポーツ指導者には、選手の技術的な指導のみならず、戦術や環境的な支援など幅広い責任が伴うため、指導者に求められる資質やスキルは複雑である[14]。そのような多様な役割が求められる指導者の行動は、選手の認知や感情、行動に多大な影響を与えているという知見が海外の研究から得られている[2][38][64]。しかしながら、指導者の行動や、その認知メカニズムに着目した研究は国内においてはほとんど見受けられない。

スポーツ指導者の養成に関して、Martensは、戦術や技術に関する知識と同様に、指導者自身の行動の認知メカニズムを表す指導哲学を確立することの重要性を述べて

いる[39]。指導哲学は、指導者が選手との関わりにおいて、指導行動を選択する際の基本的な信念と定義[62]される。指導哲学は、困難な決断や逆境に直面した際に、指導者として道徳的観念に基づいた最良の決断を下す際の指針となる[39]。

競技力向上を目指すバスケットボールの指導者にも指導哲学の確立が求められる。特に、バスケットボールは、指導者の意図が反映されやすい競技であると考えられる。バスケットボールは、時間的制約やバイオレーション(ファール以外の規則)[1]など、ルール設定が詳細であるため、審判同様、指導者も競技規則を熟知する必要がある[45]。また、コート(縦 28m×横 15m)からベンチエリアまでの距離が 2m[45]と近いため、指導者の指示が選手に伝わりやすい。さらに、局面を変えるタイムアウトの請求や交代は指導者の裁量である[1]。

よって、バスケットボール指導者の指導行動の意図となる指導哲学を明らかにすることは、スポーツ指導者養成の観点からも重要である。特に国内のトップリーグに選手を輩出している大学指導者に着目することは意義があると考えられる。しかしながら、大学バスケットボール指導者を対象とした指導哲学に関する研究の知見やその形成過程に着目した研究は見受けられない。そのため、本研究では、大学バスケットボール指導者を対象に、指導者の指導哲学とその形成過程を明らかにすることを目的とした。

第2章　先行研究

第1節　指導行動(Coaching Behavior)に関する研究

(1)　指導行動の理論：Hornのワーキングモデル

スポーツ指導者の効果的な指導に関する研究は、様々な心理学的なアプローチを用いて研究が進められてきた。Chelladurai[8)9)10)]は、スポーツ場面におけるリーダーシップ行動の影響を提示するために多次元的リーダーシップモデル(The multidimensional model of leadership)の枠組みを構築した。このリーダーシップモデルは、選手と指導者の多様な関係性とその特徴を体系的に説明するための枠組みで、選手が認知する指導者の実際の行動は、選手のパフォーマンス結果と満足度に直接的かつ相互的な影響を及ぼすことを示している。また、このリーダーシップ行動のモデルは、状況的特徴、指導者の特徴、選手の特徴、そして組織に求められる指導者の行動、選手が認知した実際の指導者の行動、選手が指導者に望む行動を含む先行要因が、選手のパフォーマンスと満足度に起因することを提示している[8)9)10)]。

Smoll & Smith[55)]は、介在的リーダーシップモデル(The mediational model of leadership)を構築した。このリーダーシップモデルは、a)指導者の行動、b)選手の認知と回想(指導者の行動に対して)、c)選手の評価、の3つの要素で指導者と選手の関係を示したモデルであり、指導者の行動は、指導者の個人的変数(性別、指導者の目標・動機、行動の意図など)の影響を受けることを示している[55)]。また、指導者の行動に対する選手の評価も、同様に選手の個人的変数(年齢、性別、自尊感情など)が影響を与えることを提示しており、指導者と選手を取り巻く状況要因(競技特性・レベル、練習や試合、過去の成功・失敗など)が、指導者の行動と指導者の行動に対する選手の評価に影響を与える点を示している[55)]。

また、Mageau & Vallerand[38)]は、Deci & Ryan[16)18)]の認知評価理論(Cognitive evaluation theory)とVallerand[60)61)]の内外発的動機づけ階層モデル(The hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation)を統合し、指導者-選手関係性動機づけモデル(The motivational model of the coach–athlete relationship)を構築した。Mageau & Vallerand[38)]が先行研究を基に構築したこのモデルは、指導者の民主的な行動は、選手の有能感の認識などに影響を与え、その結果、選手の内発的動機づけを高める点を指摘している。指導者の民主的な行動については、a)選手に自主的・独創的な活動の機会を与える、b)具体的なルールと制御に基づいた行動選択の提示、c)理論

的根拠に基づいた課題や制限の提示、d) 管理的な行動を避ける、などを挙げている。また、Mageau & Vallerand は、民主的な指導者の行動が選手のパフォーマンスやプレーの粘り強さに影響を与える点も示唆している[38]。

これらのリーダーシップモデルを基に、Horn[28]は、指導者と選手の関係性を 10 の構成要素から成るカテゴリーに分類し、指導者と選手を取り巻く諸要因を体系化したワーキングモデル(A working model of coaching effectiveness)を作成した。(図 1) モデルの構成要素は、指導者の行動の先行要因(Box1 から Box4)、指導者の行動(Box5)、指導者の行動が選手に与える影響と選手の特徴(Box6 から Box10)の 3 つのカテゴリーに大別されている[28]。このワーキングモデルは、近年のスポーツ心理学の研究を加味した上で作成され、練習や試合場面の指導者の行動を中心的な要素とし、指導者と選手の行動や認知、情動を体系化したモデルである[28]。本研究では、この Horn のワーキングモデルを基に、指導哲学とその形成過程を明らかにした。

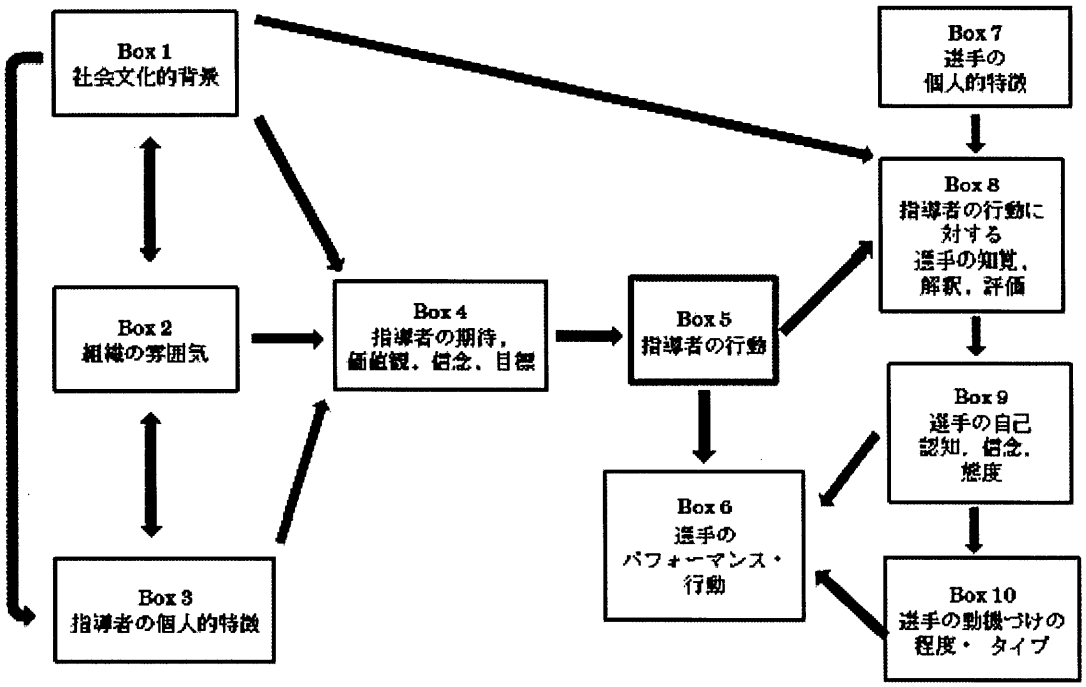

図 1　Horn のワーキングモデル(A working model of coaching effectiveness)

(2) 指導行動に関する研究

Horn[28]は、ワーキングモデルの中で、指導者の行動が選手に様々な影響を与えることを強調している。指導者の行動が選手に与える影響についての研究は、国内の研究ではほとんど見受けられないが、海外の研究では、指導者の行動が選手に与える影響についての知見が得られている。例えば、Amorose & Horn[2]は、指導者の民主的な行動が選手の内発的動機づけに影響を及ぼすことを明らかにしている。Amorose & Horn は、米国の大学トップクラスに位置するディビジョン 1 の男女 72 名の選手を対象に、指導者の前向きなフィードバックや高頻度のトレーニング指導がシーズンを通して選手の内発的動機づけを高める結果を示した。一方で、指導者の行動を独裁的だと認識した選手は、プレシーズンからポストシーズンにかけて内発的動機づけが減少する結果を示した[2]。

Isoard et al[30]は、指導者の行動が選手のバーンアウトのリスクを高める点を指摘している。Isoard et al は、Deci & Ryan[17]の自己決定理論(Self-Determination Theory)を基に、中高校生年代のハンドボール選手 514 名を対象に調査を行った。自己決定理論とは、人間の内発的動機づけを説明する枠組みであり、有能感(competence)、自律性(autonomy) 、関係性(relatedness)の要素が高い時に人の行動は強く動機付けられることを示している[17]。Isoard et al の調査の結果、指導者の管理的な行動は、選手の自律性と負の関係があり、一方で支援的な指導者の行動は、選手の自律性と有能感に正の影響を与えることを示した[30]。内発的動機づけの程度が高い選手はバーンアウトになる可能性が低く、内発的動機づけの程度が低い(amotivation)選手はバーンアウトになる可能性が高いことが指摘されていることから[14]、Isoard et al は、指導者の管理的な行動が選手のバーンアウトのリスクを高める可能性があると示唆した[30]。

また、Williams et al[64]は、484 名の大学(n=273)と高校(n=211)に所属する球技の選手(バスケットボール、バレーボール、野球、ソフトボール)を対象に CBQ(Coaching Behavior Questionnaire)を用いて、指導者の行動と選手の競技不安と自信の相互性についての調査を行った。その結果、指導者の否定的な行動は、選手の競技不安と正の関係にあり、選手の自信と負の関係にあることを明らかにした。

このように、指導者の行動は、選手の知覚や解釈に影響を与え、その結果、選手の内発的な動機づけの程度や競技不安や自信などに影響を与えることが先行研究で明らかになっている。その一方で、指導者の行動に影響を与える要因についても、いくつ

かの研究で言及されている。例えば、スポーツ現場ではないが、Pelletier et al[50]が254名の教師(男性 n=89,女性 n=165)を対象に行った研究では、教師は職場環境から外的なプレッシャーを認識している場合、民主的な行動をとる傾向が低くなり、管理的な行動をとる傾向が高くなることが報告されている。具体的には、教育活動全般における同僚との労働や追従的なカリキュラムの実施、学業成績の向上や生徒指導に対する責任にプレッシャーを感じることで、教師は自律性や内発的動機づけなどの自己決定力にネガティブな影響を受けると示された。また、Stebbings[57]は、指導者の労働環境が指導行動に影響を与える可能性を示唆した。Stebbings は、プロやボランティアなどの幅広い競技レベルの指導者 418 名(男性 n=306,女性 n=112)を対象に、オンライン調査によって指導者の心理的状態と指導行動の関係性について調査を行った[57]。その結果、心理的に健康な指導者は、民主的な行動をとり、心理的に不健康な指導者は、管理的な行動をとる傾向が強く示された[57]。さらに、Myers et al[42]は、指導者の置かれた状況や背景が指導者の自信や知覚などのコーチング効力感(Coaching efficacy)[21]に影響を与える点を示唆している。Myers et al[42]は、CES(Coaching Efficacy Scale)の質問紙を用いて、男女の大学指導者(n=101)と選手(n=1648)を対象に調査した結果、大学チームの豊富な指導経験、チーム勝利率の高いキャリア、選手の親や地域から社会的な支援を受けていると認識している指導者は、選手の自己効力感を高めることに対する自信を持っていることが明らかになった。

第 2 節　スポーツ指導者の指導哲学とその形成過程に関する研究

先行研究でも示されているように、Horn[28]はワーキングモデルによって、社会文化的背景、組織の雰囲気、指導者の個人的特徴などの先行要因が、指導者が持つ期待、価値観、信念、目標などに影響を与え、それが指導者の行動に影響を与える点を指摘している。このような指導者の期待、価値観、信念、目標を包括する指導哲学は、 指導者が選手との関わりにおいて、指導行動を選択する際の基本的な信念と定義され[62] 、困難な決断や逆境に直面した際に、指導者として道徳的観念に基づいた最良の決断を下す際の指針となる[39]。スポーツ指導者の養成に関して、Martens[39]は、戦術や技術に関する知識と同様に、 指導者自身の指導哲学を確立することの重要性を述べている。指導者の指導哲学は指導者の行動に大きく起因し[28]、そのことが選手のパフォーマンスや行動を左右することからも国内外でいくつかの研究が行われてきた。

Côté et al[12]は、17名の体操競技指導者を対象にインタビュー調査を行い、指導哲学を包括的に理解するためのコーチング・メンタルモデルを構築した。調査の結果、17名の指導者は、選手の潜在的な資質を引き出すことを中心的な目標に据え、選手の発達を最終的な目的としていることが明らかになった[12]。このメンタルモデルは、試合、練習、運営の3つの中心的要素と指導者・選手の個人的な特徴や選手の発達段階などの周辺的な要素で構成されている[12]。Côté et al[12]は、その中心的要素と周辺的な要素の相互作用によって、選手を育成することが重要である点を示唆しており、オリンピックレベルの体操指導者が人間的な成長を重視する指導哲学を持っていたことを明らかにした。

また、Benni & O'Connor[5]は、プロチームのクリケット、ラグビー、ラグビーユニオンの指導者と選手を対象にインタビュー調査を行った。その結果、プロチームの指導者は、勝利することに限定しない選手の全面的な成長を重視する指導哲学を持っていることが明らかになった[5]。指導者は、選手がプロとして活動できる期間が限られていることから、競技を引退した後のキャリアを見据え、オフフィールドの面での選手の成長を促す責任がある点を強調した[5]。近年は、スポーツの経験が選手の社会的な成長に大きく寄与することから、指導哲学とライフスキルとの関係に焦点をあてた研究が進められている[7][26][27][63]。Gould & Carson[26]は、ライフスキルを、スポーツで促進または発達し、スポーツ以外の場面で役立つ目標設定、感情のコントロール、自尊心、職業観などの個人が所有する特徴やスキルと定義している。例えば、Camiré et al[7]は、カナダの高校指導者(n=9)を対象にインタビュー調査を行い、ライフスキルの育成を重視する指導哲学を持っていたことを明らかにした。具体的には、問題解決能力やチームワーク、礼儀を重んじる精神などがライフスキルとして挙げられ、また、指導者は、スポーツを教育のツールとする考え方やスポーツの経験を通して培った能力やスキルが、社会生活においても役立つという信念を持っていたことが明らかになった[7]。

さらに、Becker et al[4]は、選手がどのような指導者を優秀な指導者として認知しているのかを明らかにするため、男女18名(男性n=9,女性n=9)のエリート選手にインタビュー調査を行った。その結果、指導者の資質(Coach attributes)、環境(Environment)、関係性(Relationships)、指導行動(Coaching actions)、選手への影響(Influences athlete)の5つの要素が示された。特に選手は、指導者としての専門的な

技術指導に加えて、強いプレッシャーの中で指導者自身が情緒的な安定性と平静を保つこと、選手に自信を醸成させること、1対1のコミュニケーションを大切にすること、などを高く評価をしていることが明らかになった。

Gilbert & Trudel[25]は、アイスホッケーの指導者(n=3)とサッカーの指導者(n=3)、計6名のジュニアスポーツの指導者を対象に、2年間の多角的な事例研究を行った。その結果、指導者はスポーツ場面の指導のみならず、選手の年齢や競技レベルを配慮しており、安全面やスポーツの楽しさを提供すること、チームで勝利することに加えて、選手の個々の人間的成長を考慮した指導など、スポーツ指導者が教育者として幅広い役割を認識していることが示唆された。

国内における指導哲学に関する唯一の研究では、北村ら[31]が、高校のサッカー指導者8名を対象にインタビュー調査を行い、質的なアプローチによって「熟達化」「意識化」「支援」の3つ要素を含む指導哲学モデルを提示した。サッカー指導者の指導哲学は、選手の個性や多様性を育みながら、基礎的なスキルの習得を目指す「熟達化」、選手の練習に対する自覚と姿勢、思考力・判断力を高める「意識化」、スポーツに専念できるような環境への「支援」の3つの要素から構成されていた。北村らは、サッカー指導者の指導哲学は、プレーパフォーマンスに限定されず、選手の人間形成を考慮した教育的な側面を有していることを明らかにしている。

このように、指導哲学に関する知見は主に海外の研究から得られている。しかしながら、どのような要因が指導哲学の形成に影響し、どのように発展するのかなど、その形成過程に着目した研究は見受けられない。関連した研究として、指導者の成長過程に焦点をあてた研究や、指導者養成に関する研究は海外で盛んに行われてきた。例えば、Sáiz et al[52]は、スペインのトップリーグに所属する指導者8名にインタビュー調査を行い、指導者の成長段階に着目した。その結果、指導者としての成長段階として「練習の模倣」(Imitative practice)、「練習の反映」(Reflective practice)、「知識の発展」(Development knowledge)、「指導者としての熟達」(Expert coach)の4つのステージが提示された。指導者は、選手としての練習経験や他の指導者の指導法を観察するなどの「模倣」から、講習会や研修などを通して得た知識やスキルを実際の指導現場で活用していく過程で自身の指導スキルを向上させる点が示された。

また、Smith et al[53]は、優秀な指導者の指導行動に関する研究データの蓄積[54]によって開発された指導者の教育プログラム(CET: Coaching Effectiveness Training)の検

証を行った。Smith et al[53]は、CET の介入的教育を受けた指導者と、そうでない指導者の間での、指導者の行動に対する選手の知覚の違いを報告している。さらに、選手の自尊感情やスポーツ参加率の向上においても CET の効果が見られている[53]。このように、指導者の成長や養成に関する研究は多数行われているが、指導行動の原点になると考えられる指導哲学の発展や、形成過程に焦点をあてた研究は行われていない。

第3章　目的

現在、国内におけるバスケットボールのトップリーグは、男子においてはbjリーグと NBL(National Basketball League of Japan)の2つのリーグがあり、女子においてはWJBL(Woman's Japan Basketball League)が存在する。2014-2015シーズン(11月現在)では、約72%の日本人選手が大学でプレーした後、トップリーグの選手となっていることが示されている[6)43)65)]。この点から、大学バスケットボールの指導者は、国内のトップリーグに大きく寄与しており 、現在の日本のバスケットボール界に大きな影響を与えていることが考えられる。このような大学バスケットボール指導者の指導行動の原点となる指導哲学を検証し、またその形成過程を明らかにすることは、競技力向上と指導者の養成を目指す日本バスケットボールに意義があると考えられる。そこで、本研究では、Horn[28)]のワーキングモデルに則り、大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程について明らかにすることを目的とした。

第4章　方法

第1節　対象者の選定基準

表1に研究対象者の基本情報を示した。対象者の選定においては、目的的な抽出法(purposive sampling)に則し、リサーチクエッションに正対する人物である対象者4名を選定した[49]。先行研究[7)26)27)31)63)]を参考に、a)大学男女バスケットボール部(1部リーグ)の監督もしくはヘッドコーチ、b)全国大会レベルで継続的にチームを勝利に導いた実績を持つ[67)](過去10年間で3回以上ベスト8以内に入っている)、c)チームや選手を人間形成の観点からも指導している(日本バスケットボール協会などに所属する複数の指導者から高い評価を得ている者)、d) 現在もチームの指導にあたっている、または、指導現場を引退してから1年未満、e)バスケットボール指導者としての指導歴が10年以上、の5つの項目を設定し、すべての条件を満たす指導者4名にインタビュー調査を実施した。そのうち、2名は男子のバスケットボールチームの男性指導者であり、残りの2名は女子バスケットボールチームの男性指導者と女性指導者の1名ずつであった。研究対象者の年齢は、44歳から66歳(平均は52.3±8.4歳)、指導歴は14年から45年(平均は24.5±12.5年)、2014-2015シーズンでプレーしているプロ選手(NBL、bjリーグ、WJBL)の輩出人数は、3名から20名(平均は13.0±7.3名)、全日本大学バスケットボール選手権大会(以下、インカレと表記)での優勝回数は、0回から4回(平均は2.3±1.5回)、過去10年間のインカレベスト8入りの回数は、5回から10回 (平均は6.8±1.9回)であった。また、選定条件の信頼性を高めるため、研究対象者の繋がりを介して新たに調査に適した人物を紹介するというスノーボールサンプリング(snowball sampling)[51)]も実施した。

表1　研究対象者のプロフィール

	指導者A	指導者B	指導者C	指導者D
性別	男	男	女	男
指導チームの性別	男	男	女	女
年齢(歳)	66	52	44	47
指導歴(年数)	45	14	15	24
プロ選手の輩出(人数)	9	20	3	20
インカレ優勝(回数)	3	4	2	0
インカレベスト8(回数)	6	10	5	6

第2節　研究の手続き

(1)　質的インタビュー

本研究では、指導者個人の経験やその現象の本質を記述していくため、現象学的アプローチ(phenomenology approach)を用いて[13)15)]、研究協力者の描写に則し、大学バスケットボール指導者4名にインタビュー調査を実施した。質的研究では、研究者自身が研究の重要なツールとなる[36)]。そのため、Dale[15)]の現象学的な研究方法に基づき、インタビュー実施前に研究者の研究トピックに対する関心や経緯、背景などの考えを記述した(添付資料A:研究トピックの関心や経緯と背景に関する記述 参照)。これは、研究者自身の固定観念やバイアスを明らかにすることで、指導者が語る指導哲学についての理解を得るためである[15)]。

インタビューの実施にあたり、指導哲学と形成過程の2つの研究目的に基づいた回答が得られるよう、質問項目の選定を行った(添付資料B:インタビューガイド 参照)。また、指導経験を有する3名のバスケットボール指導者にパイロットインタビューを実施し、質問項目の精選とフィールド観察やインタビュースキルの向上を図った。

研究対象者への調査依頼については、筆者自身が行い、E-mailと電話によって日時・場所などの日程調整を行った。まず、インタビューは、調査目的を説明した後に、対象者の背景に関する基本的な情報から質問した。次に、ラポートの形成(rapport-building)[35)]を図るため、「バスケットボールの指導を始めたきっかけについて教えてください」などの質問の後、「これまでのご経験から、選手を指導していく上で、どのようなことが大切だとお考えですか?」、「現在の指導者としての信念や考え方は、どのような過程を経て形成されていったと思いますか?」の2つの基幹的質問(main question)に従って進めた。本研究では、1対1の半構造化(semi-structured)、深層的(in-depth)インタビューを実施した[35)]。インタビューは、質問項目の内容に則して進めたが、指導者それぞれの個別性を考慮し、追跡的質問(follow-up question)や、探索的質問(probes question)など、必要に応じて柔軟に行った[51)]。また、研究対象者には基幹的な質問項目を事前にEメールで送付し、インタビュー概要の理解を図った。インタビューは、約45分から79分行い(平均時間58.6分±12.8分)、対象者が所属する大学の研究室や会議室で筆者自身が実施した。インタビューの内容は対象者に同意を得た上で、音声をICレコーダーに録音し、インタビュー中は対象者の発話内容とノンバーバルコミュニケーション(表情、視線、身振りなど)を観察しながら、随

時フィールドノートに記録した。そして、インタビュー終了直後は、対象者の基本情報やインタビュー内容の要約、簡易的な分析をコンタクトサマリー(contact summary)に記述した(添付資料 C:コンタクトサマリー 参照)。調査は、2014 年 8 月から 11 月の 3 カ月間で実施した。

(2) 倫理的配慮

本研究では、ヒトを対象とする調査を実施するため、「順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科研究等倫理要綱」に基づき、研究等倫理審査申請書を提出し、研究倫理委員会の承認を持って、研究対象者 4 名にインタビューを実施した。研究対象者には、a)個人の特定化を避けるため氏名及び所属に関する情報を匿名化する、b)個人情報漏洩の防止対策を講じるため、入手したデータ等はパスワードをかけて管理する、c)研究対象者は本人の意思で自由に調査協力を辞退することができ、これによって不利益をもたらせないこととする、の 3 点について同意書を通じて確認を行い、本人のサインを持って同意を得る手続きをとった。また、研究対象者の選定条件が限定的なため、その旨を口頭で説明し、研究対象者が公表前に論文内容を確認する機会を提供することで、論文発表の同意を得た。

第 3 節　データ分析

本研究では、Patton[49]と Côté et al[11]の質的研究の分析方法を基に、Horn[28]のワーキングモデルとの関連性を考慮しながら、インタビューによって得られたデータを帰納的に分析した[41]。まず、IC レコーダーに録音した音声データは、インタビュー終了後、直ちに筆者自身でインタビューのテキスト化（トランスクリプトの作成）を行った。また、データの包括的な理解を図るため、2 名の研究者で数回にわたってテキストを熟読し、テキスト化された発話だけでなく、前後の文脈や言葉の背景、ノンバーバルな表現、コンタクトサマリーからの情報も踏まえ、研究者それぞれが指導者の指導哲学とその形成過程について総合的に理解するよう配慮した。

次に、研究対象者のそれぞれインタビュー・トランスクリプトから、2 名の研究者が個別で、「指導哲学」と「指導哲学の形成過程」の 2 つに該当すると思われるものを抽出し、意味単位(meaning unit)の生成を行った[58]。意味単位とは、文章・成句を表す 1 つの概念であり、研究目的を表す最小の単位である。また、同じ概念だと思わ

した。 カテゴリーの概念が統合できる場合は、抽象度の高い大カテゴリーとして類型化した(マップの作成)。最後に、2名の研究者が個別に分析したデータを共有し、研究対象者それぞれのマップを類似性、相違性、因果関係を考慮しながら議論し、バスケットボール指導者の指導哲学と形成過程のマップを作成した(図2, 図3 参照)。

第4節　信頼性の検証

本研究では、1つの現象に対して、異なる理論的立場を組み合わせることで信頼性を担保するとされるトライアンギュレーション[49]とメンバーチェック[13]を実施した。

(1)　研究者によるトライアンギュレーション

2名の研究者それぞれで個別に意味単位の生成やカテゴリーの作成を実施した後、それぞれの研究者によって作成したデータ分析の内容について、両者の完全な合意が得られるまで議論を行い、意味単位及びカテゴリーの検討・編集を繰り返した[49]。

(2)　メンバーチェックによる信頼性・妥当性の検証

メンバーチェック(member check)とは、データと暫定的な解釈をデータ提供者へ提示し、その分析結果が妥当で、信頼できるものかどうかを確かめる過程のことである[13]。本研究では、インタビュー・トランスクリプトと、分析から得られたそれぞれの指導哲学とその形成過程についてのマップを4名の研究対象者にEメールで送付し、内容についての意見を求めた。その結果、本人らからの反対意見は得られなかったため、研究データの妥当性と信頼性が担保されたと考えられる[13]。

第5章　結果

第1節　指導哲学

本研究では、96ページのインタビュー・トランスクリプトが作成され、392の意味単位が抽出された。指導哲学の中では、(1)「指導への取り組み」、(2)「指導の観点」、(3)「指導者として必要なスキルと特徴」、(4)「選手として必要なスキルと特徴」、(5)「選手との関わり方」、(6)「チームの在り方」、(7)「戦術・戦略」の7つの大カテゴリーが生成された(図2)[註1)]。以下、インタビューの発話内容と対照させながら、各カテゴリーの主要な内容について記述した。

- 指導への取り組み
  - 段階的な指導(A,B,D)
  - 理論的な指導(A,B)
  - 感情的に追い込む指導(A)
  - プレーの徹底(A,D)
  - 実力を発揮させる指導(A,D)
  - 目標・目的に基づいた指導(B,C,D)
  - 自己主張力を高める指導(C)
  - 可能性を広げる指導(A,C,D)
- 指導の観点
  - 人格の形成(A,B,C,D)
    - 学業と部活動の両立(A,B)
    - 学習志向(B,D)
    - ライフスキルの育成(A,B,C,D)
  - 帰属意識の醸成(A)
  - 環境作り(D)
  - 結果の重要性(A,D)
  - 実践の重要性(A)
  - プロセスに焦点をあてる(B,C,D)
  - 日本バスケットボールの競技力向上(B)
  - 世界基準の選手の育成(D)
- 指導者として必要なスキルと特徴
  - 指導者のスキル(A,C,D)
    - 観察スキル(A)
    - 説明するスキル(A)
    - 選手の動機づけ(D)
    - 工夫するスキル(A,C)
  - 指導者の特徴(A,D)
    - 柔軟性(B)
    - 学習志向(D)
    - 忍耐性(D)
- 選手として必要なスキルと特徴
  - 選手として必要な身体的スキルと特徴(A,B,C,D)
    - 身体的スキル(A,B,C,D)
      - シュート(A,C,D)
      - リバウンド(A,B)
      - ディフェンス(A)
      - ファンダメンタル(A,D)
      - コンタクト(A,D)
    - 身体的特徴(A,C)
      - ビッグマン(A)
      - 体力(C)
  - 選手として必要な心理的スキルと特徴(A,B,C,D)
    - 心理的スキル(A,B,C,D)
      - 前向きな思考(A,B)
      - 思考(A,D)
      - 理解(A)
      - 状況判断(A,B,C)
      - 自己認知(C)
      - メンタルタフネス(A,B,D)
      - 動機づけ(B)
    - 心理的特徴(D)
      - 自尊心(D)
  - 再現性の高いスキル(A)
- 選手との関わり方
  - コミュニケーション(A,B,C)
    - 個々とのコミュニケーション(A,B,C)
    - 多様なコミュニケーション(A,C)
    - リーダーとのコミュニケーション(A)
  - 共同関係(A,B,C)
  - コーチとしての意識(C,D)
  - 選手と指導者の共通理解(A)
  - 選手を一律に扱う(A,C)
  - 選手の認知の重要性(D)
- チームの在り方
  - チームスタッフとの連携(C)
    - 学生スタッフとの連携(C)
    - アシスタントコーチとの連携(C)
  - 1度の失敗は許容する(A)
  - 共通理解(A)
  - 成果のあるルール破り(A)
  - "個"の自覚と責任(B)
  - 凝集性(A,B)
- 戦術・戦略
  - チームオフェンス(A,C)
    - 速攻においてはパスを優先(A)
    - オフェンスリバウンド(A)
    - オフェンスのルールは最小限(C)
  - チームディフェンス(B)
  - コンバージョン(A,C,D)
    - ターンオーバー(C)
    - トランジション(C,D)
    - リバウンド(A)
  - 個人スキル(A,D)
    - 1対1(A)
    - 集団と個のスキルのバランス(D)
  - 原理・原則に基づいた戦術(A,C,D)
  - 合理的な戦略(A,D)

図 2　指導哲学のマップ

註 1)　指導者それぞれの発話結果の個別性や共通性を明記するために、指導者 A から指導者 D を意味する発話結果の表記を括弧内に示した。

例　指導者 A と B が発話した場合は、(A,B)と記載。

(1)　指導への取り組み

このカテゴリーでは、段階的な指導、理論的な指導、感情的に追い込む指導、プレーの徹底、実力を発揮させる指導、目標・目的に基づいた指導、自己主張力を高める指導、可能性を広げる指導、という指導者が選手を指導する中で実際に心がけている指導実践の考え方について示された。その中の理論的な指導では、バスケットボールのプレーに繋がるような根拠に基づいた練習を提示し、論理的に順序立てて選手に説明する指導が重要であること示された。例えば、理論的な指導について、指導者 A と指導者 B は次のように述べた。

「指導には、ストーリーが必要なんですよ。例えば、こういうプレーをやるよ、という概略を説明して、それで、自分がそれをやってみせる。(中略)、その中で、1 回 1 回、指導。ゆっくりやって指導。目指しているプレーをやれないときは、こうやってやるんだろ、こうだろ、ってやる。それでゲームスピードになった時も、そうなってない時は、必ず止めてやる。」(指導者 A)

「こういうディフェンスをすると全体を見せた後に、ブレイクダウンドリルをすっごいやるんですよ。でも、最後そこにこう行くんですよ。最初見せて、ブレイクダウンして、こう作っていく、(中略)、で、5 対 5 になって、こう動かして、図に書いたり、こういう時はこうして、こうだって。それが全部、(間をおいて)、組み込まれた練習をやっている」(指導者 B)

このように、戦術やチームプレーに繋がる練習全体の目的や位置づけを提示した後、その戦術に必要な個人スキルなどのドリル練習を分解して選手に説明すること、また、試合や練習場面で実際に起こったプレーについて、根拠を示しながら 1 つ 1 つ説明を加え、プレーを徹底させる指導が大切であることが示された。

また、感情的に追い込む指導について、指導者は選手の心理面に意図的に負荷をかけ、試合場面で実力発揮ができるように働きかけることが重要であると示した。指導者 A は、感情的に追い込む指導について次のように述べた。

「やっぱり感情的に追い込まないと、その人が真の力を、切羽詰った時に出してくれないというのを、ずっと信念として持っている」(指導者 A)

練習や試合場面で指導者自身が意図的に選手の心理面や情緒面を鼓舞し、選手の潜在的な能力を引き出すような指導が重要である点を指摘した。また、指導者の取り組みとして、明確な目標設定と選手に目的意識を根付かせるような働きかけが重要である点が示された。このような目標・目的に基づく指導について、指導者 B は次のように述べた。

「本気になって、まぁそこの(高い)レベルに来るまでって、すごく時間がかかるんですけど、(鼻で息を吸う)、目標を決めます。目指すとこを決めます。で、本気になれるかどうかだと思います。」(指導者 B)

指導者 B は、チーム一丸となって設定した目標を達成するために、選手個々のコミットメントを向上させるような信頼関係を築くことが重要である点を強調した。また、この点について、指導者 C は、次のように述べた。

「何で今、ここ(大学)でバスケットをやっているのっていうのは、すごい言います。ほとんどの子は考えてない。(中略)、4 年生も今年は全員、就職が決まって、バスケットを続ける子がいないので、そうするとやっぱり本気になってやるんですよね...」(指導者 C)

指導者 C は、選手に大学でバスケットボールをすることの意義を考えさせることで、選手に明確な目的意識を持たせ、選手たちの主体性を引き出すことが重要であることを示した。一方、指導者は選手を統制するだけでなく、選手の様々な選択の幅を容認する姿勢や柔軟性を持って指導することが大切であるとし、可能性を広げる指導を重視する考えについて言及した。可能性を広げる指導について、指導者 C は次のように述べた。

「私なんかすごく思うのは、私の肩幅を超えた選手でいてほしいんですよ。まぁ自分が現役選手だったんで、まぁそのバスケットプレーっていうか、こういうもんだぁっていう、まぁ、完全形態があるわけですよね、だけど、それを跳び越えてもいいなぁって思っていて、そういう選手って面白いなぁって、そんなプレーもあるのねとか、なるほど、そういう選択肢だったのねとか、っていうのが私の持ってないものが、そのあっていいと思うんですよね。」(指導者 C)

このように指導者は、選手との考え方の違いや提案を受け入れる柔軟な姿勢を持つことで、選手の主体性や自主性を高め、プレーの幅を広げるだけなく、選手の可能性を最大限に引き出すような指導を重視する信念を持っていたことが明らかになった。

(2) 指導の観点

このカテゴリーでは、学業と部活動の両立、学習志向、ライフスキルの育成、帰属意識の醸成、環境作り、結果の重要性、実践の重要性、プロセスに焦点をあてる、日本バスケットボールの競技力向上、世界基準の選手の育成という、指導者が選手を指導していく中で大切にしている視点や展望について示された。その中の帰属意識の醸成とは、大学の組織全体の位置づけの中で、バスケットボール部の意義と在り方を選手に忠実に伝え、チームとして結束する雰囲作りが重要であることを示すものである。指導者 A は、帰属意識の醸成にについて次のように述べた。

「やっぱり帰属意識をいかに持たせるか。それは母体のチームじゃなくて、学校とか企業とか、そういうことが何を考え、何を求めているかがスタート...」(指導者 A)

指導者 A は、母体の組織が掲げる理念に基づいて、チームの方向性を示し、またそのことを選手に忠実に伝えていく過程が重要である点を指摘している。また、3 名の指導者が結果だけでなく、努力の過程に焦点をあて、選手を内発的に動機づけることが重要である点を指摘した。例えば、プロセスに焦点をあてることについて、指導者 C は次のように述べた。

「大学くらいになってくると、その努力が全部報われるわけではないので、すごく頑張っても、試合に出れない子はいますから、そういう時はやっぱり、あのー、試合に出る出ないという事じゃなくて、その努力そのものに目を向けてやらないと…」(指導者 C)

また同様に、指導者 B もチームや選手の成長のプロセスに焦点を置いた考え方について次のように述べた。

「みんなオフェンスは楽しいですよね、シュートを決めるし、まぁ積極的に、それはどんどんやるべきですけど、ディフェンスの喜びっていうのもあるんですよ。(中略)、チームで守って 24 秒取った時に、みんなでよーし、やったって、って言ったり、本当にここ 1 本集中してスクリーン助け合ってね、スイッチして何してもこうね、守って、そういう喜び。うん、ディフェンスの喜びを実感できてくるとねー、良いディフェンスチームになっていけるんじゃないかなと、思います。」(指導者 B)

トップレベルの大学指導者は、選手の努力のプロセスに視点を置き、選手の「楽しい」という気持ちを促進させるなど、内発的な動機づけに働きかける視点を持っていることが明らかになった。それとは逆に、結果の重要性について、指導者 D は、次のように述べた。

「結果として、やっぱ、勝負だから、競技スポーツで結果が全てなんで、やっぱ、勝たないと周りの人は評価してくれない」(指導者 D)

大学のトップレベルのチームを指導している点から、競技スポーツの特徴とその厳しさについて述べており、また、競技成績という有形な成果として結果を残すことの重要性を指摘した。しかしながら、4 名の指導者全員が、学生を指導していることから人格の形成、特に社会に出ていくことを前提に、選手を人として育て、社会人として必要なライフスキルの育成を重視している点が示された。例えば、指導者 B はライフスキルの育成について次のように述べた。

「私は、その一、コーチというものがどうなのかってのは分からないんですけど、やっぱり1番は選手たちが自主、自立ができて、自分たちで考えて、行動ができるというのが、すごい大事じゃないかなと、そのための、まぁ、アプローチであったり、叱責であったり、褒めたりとか、コーチとしての行動、というところをまず、考えなきゃいけないんじゃないかな」(指導者B)

このように選手の自立を第一に考え、指導者としての言動を選択していくことが重要であることが示された。指導者は、選手の成長にとって何が重要であるのかという点を熟考し、選手の人格形成に焦点をあて、大学の指導者としての役割や教育者としての責任を全うすることが重要である点が示された。また、日本のトップレベルの大学チームを指揮していることから、指導者Dは世界基準の選手の育成について、次のように言及した。

「メンタルの部分で、自分がやっぱり世界で戦うんだっていう意識をずっと持っている、持ち続けることだよね。だからもう、ダメだと思わないことっていうか、それはもうサイズの問題とか、スピードの問題とか、ではなくて、もう、何か可能性があるっていうことをずっと考えて、練習していくことだと思うけどね」(指導者D)

日本が世界の強豪国と戦っていくためには、指導者自身が将来を見据え、世界のバスケットボールに目を向けて選手を育成することが重要である点が指摘された。特に、指導者は、先天的に備わっている身体能力や体格などの不利な条件を理由に諦めるのではなく、海外のバスケットボールの現状を把握し、日本人の長所や特徴を生かしながら日々練習を積み重ね、世界で通用する選手を育成する長期的な観点を持っていることが明らかになった。

(3) 指導者として必要なスキルと特徴

このカテゴリーでは、観察スキル、説明するスキル、選手の動機づけ、工夫するスキル、柔軟性、学習志向、忍耐性、という指導者に求められる指導スキルとその特徴について示した。その中の説明するスキルは、指導者は、選手と信頼関係を築く上

で、選手が納得するような説明能力が必要であることを示したものである。例えば、指導者Aは、説明するスキルについて次のように述べた。

「信頼関係を作らなければいけないんだけど、それは、指導者と選手というのはある意味、立場が違うので、まぁそこら辺が、理解ができるような指導というか、コーディネートするというか、そういう能力は必要だと思いますよ。つまり、説明能力ね」(指導者A)

指導者Aは、選手と信頼関係を構築するために、その時々の状況や選手と指導者の立場の違いを選手が納得できるような形で説明することが重要である点を指摘した。このような伝え方を重視する考えの背景には、選手の理解や認知、解釈を前提とした選手の立場で物事を考える発想が根本にあるためであると語った。また、工夫するスキルについて指導者Cは次のように述べた。

「あの、20人ぐらい部員いるんだけど、リングが一対しかないわけですよ。その中でシュートをどうやってこう、シュート力を上げていこうとか、って考えたり、あとは、その中の動きの中で1対1を考えたり、(中略)、そういう環境の中でやっていくからこそ、その時間を大事にしなくてはならないよねとか、工夫しなきゃダメだよねとか、その環境の中で、こうだからできないもんって言うんじゃなくて、出来ることを考える、あるいは(実現)できるように考える」(指導者C)

このように、大学のチームを指導するため、大学の設備や施設、さらには学業との両立の必要性など、限られた状況や与えられた環境の中で思考を巡らせ、実現可能な方法を創造し、工夫することが指導者にとって重要なスキルである点が示された。また、指導者の学習に対する高い動機づけと姿勢が示され、継続的な学びの重要性が語られた。このような学習志向について、指導者Dは次のように述べた。

「そういうのは、やっぱ、自分自身がもう、もう1回、初心に戻るというか、そういうのは自分で怠らないようにはしてるつもりなんだけどね」(指導者D)

学習志向について、指導者は、指導の原点に戻ることや初心に帰ることが重要であることを示した。特に、指導者は、指導経験や指導実績を積み重ねていくと、選手の可能性を限定してしまう傾向があることを言及した。そのため、模範となる指導者や実績を有する指導者、競技カテゴリーの異なる指導者などから定期的に教えを乞い、指導現場の外に学びの機会を置くことで、指導者としての高い学習姿勢を保っていることが示された。

(4) 選手として必要なスキルと特徴

このカテゴリーでは、選手として必要な身体的スキルと特徴、選手として必要な心理的スキルと特徴、再現性の高いスキル、という指導者が選手に求めるスキルとその特徴について詳述した。その中の、選手として必要な身体的スキルと特徴について、指導者 A は次のように述べた。

「去年よくやったのは、リング下で 3 回入れるまで、オフェンスディフェンス関係なしに 2 対 2 をやらせて、3 回ゴール下を決めたチームが勝ちというのを、続ける練習をやりましたけどね、10 分間。 そうするとファールもするし、変なシュートも打つんだけれど、やっぱりその中で身体接触をしながら打っていく、それから身体接触をしながらリバウンドを取りに行く。それはアンダーバスケットのリバウンドの練習にもなる…。」(指導者 A)

身体的スキルの中では、シュート、リバウンド、ファンダメンタル、コンタクトなどが挙げられた。特に指導者は、このような身体的スキルを、日々の練習の中で習慣化させることが重要である点を指摘した。もし、試合中にそれが表現出来ていなければ、再度、練習の中でそれを強調し、選手が習慣化できるレベルまで練習を積み重ねていくことが述べられた。一方、選手として必要な心理的スキルと特徴について、指導者 B は次のように述べた。

「困難な時、しんどい時、きつい時、昨日の練習でありました。その時にすごい、ちょっと、元気がなくて、やらされてる感がありました。その時に、はい、って言います。声がけします。今みんなは、あの一、多分、E(エースのケガ)を抜きにして、勝つ

ってことは相当困難なことだと俺は思うと。だけど、みんなが力を合わせてやれば、俺は乗り越えられると思う、ただし、今はきついよな。このきつい時に、きついって、声を出したら、負けるよって。心やここ(頭を指さして)まで折れちゃダメだって。体はしんどいよ、当然しんどいんだって。ここで、よしやってやるって、ワッとこうみんなが(力を)出せるようなね。まぁその、誰かが(声を)出してよしやろうって、なれるチームが1点勝つって、昨日話しました。そしたら、その後もきつい練習が続くんですけど、すごい元気を出して、彼らが発信して、盛り上がって、ディフェンス練習をやってました。」(指導者B)

指導者Bのチームでは、リーグ戦中にエースがケガによって試合を欠場する状況になった。指導者Bは、そのような避けたい困難な状況と向き合い、前向きに捉えるようなメンタル面が重要であることを示した。このような困難な状況を克服するようなメンタルタフネスが選手に必要な心理的スキルである点が示された。また、このメンタルタフネスについては、3名の指導者が選手に重要な心理的スキルであることを言及した。一方、再現性の高いスキルについて、指導者Aは次のように述べた。

「でもそれが1回、2回、3回、4回と続かないと、そんなのまぐれに決まってるじゃないかと、いわゆるいつも言っているように、再現性を求める。同じプレーがいかにできるかということが、大事なんだ、試合も。その再現性のないことを何回やっても、それはまぐれですよ...」(指導者A)

試合場面で起こる偶発性の高い選手の"ゾーン"(高いパフォーマンス発揮が起こった状態)に対する考え方を述べた発話であり、練習の成果をゲームで繰り返し再現できるスキルが選手に必要なスキルとして示された。

(5) 選手との関わり方

このカテゴリーでは、コミュニケーション、共同関係、コーチとしての意識、選手と指導者の共通理解、選手を一律に扱う、選手の認知の重要性、という指導者が選手との関わりにおいて重視している考え方や接し方が示された。その中のコミュニケーションについて、指導者Bは次のように述べた。

「成績表を出して、私が全部チェックをしているんですよ。そうすると、100何10中、100何番は、ほら2桁にしなさい。もっと頑張んなさい、単位はいいけどなぁとか言いながら、1人1人ね、何かあるか? 何とか、とか言いながら、コミュニケーションを取って、大体、60人70人やります。(中略)、だからそういう、のは年に2回は、全員と1対1で(中略)、特にB(チーム)の子達は、練習を見ていないし、1番何て言うんだろう、うーん、いや、私が2, 3人いればいいんだけど、そうは行かないしねぇ、だから、こういう機会大事にね...」(指導者B)

この発話は個々とのコミュニケーションについての内容であり、指導者Bは、部員70名の学業成績を年に2度確認する機会を設けており、これによって選手一人ひとりとの対話を通してコミュニケーションを図っている点を示した。

また、指導者Cは多様なコミュニケーションについて、携帯のアプリケーションであるLINEやバスケットノートなどのコミュニケーションツールを活用し、さまざまな形で選手と対話することを重視する考えを持っていた。次に、共同関係について、指導者Bは次のような考えを持っていた。

「まず、人として、人と人、上下(うえした)もない。人と人として、まぁ付き合う。付き合うというか、まぁお互い尊敬の念、敬意を持つ、ことが大事だと思います。 で、そこには、足りない分、わからない分は、私が知っていれば、当然、教えたり、聞いたり、だから、まずここに、なんて言うんだろ、私のこれ考えですけどね、あのー、上だとか、下だとかそんなのはない。」(指導者B)

指導者と選手の関係において、互いを尊重し合い、同じ目的や目標に向かって共に課題を乗り越えていく同志やパートナーであるという考えを持っていることが語られた。また、指導者Dは、選手の受け止め方や選手の立場に立って物事を考えるという、選手の認知の重要性について次のように述べた。

「だから、最終的な、いくらこっちが要求しても、本人が、どういう風に受け止めるかで、全く答え、返ってくる答えが違ってくる」(指導者D)

指導者Cは、与えられたものをただこなすだけでなく、選手が自ら考え、行動できるような、自立や自律を促す関わり方が重要である考えを示した。このことから、指導者は、選手の認知や解釈に主眼を置き、選手を自立させることを前提に、言動を選択する考えを持っていたことが明らかになった。

(6) チームの在り方

このカテゴリーでは、チームスタッフとの連携、1度の失敗は許容する、共通理解、成果のあるルール破り、”個”の自覚と責任、凝集性、という、指導者としてチームを指揮していく上で、チームの望ましい方向性に対する考えを詳述した。例えば、指導者Cは、チームスタッフとの連携について次のように述べた。

「1人より、2人の知恵の方が絶対良いような気がするのよ。で、それは、アシスタントじゃなくて2人いるんだから、迷った時とか、分かんない時とかに意見を聞く、あるいは、彼女(アシスタントコーチ)らが意見を言って、その中でいいやつを、そのヘッドコーチって、自分の責任で持って裁量で選べばいいんだと…」(指導者C)

大学のチームの実態としてスタッフが学生であることが多いため、学生スタッフとの連携を図ることや、アシスタントコーチと意見を交わし、議論を交えていく中で、最終的な決定権と責任はヘッドコーチが持つというようなスタッフの組織化を図ることの重要性を指摘した。また、指導者Aは、ルールのある成果破りについて次のように述べた。

「ルールはこうあるよね、でも、ルール破りはオッケーよと。そのかわり成果を求める。ルール破りをしたら。例えば、ボールマンディフェンスをやってて、左に行かせなさい、右に行かせなさいというときに、あえてそれをしないで、次のところでインターセプトをしたとか、じゃあ結果オーライであればいいんですねと。いいよと」(指導者A)

指導者Aは、選手一人ひとりがチームの規則やルールを遵守することに固執するだけでなく、選手の選択に柔軟性と幅を持たせることで、チーム全体としての成果を重

視する考えを言及した。また、チームとしての強い結束力や統合性を意味する凝集性について、指導者Bは、次のように述べていた。

「勝つときもみんなで、負けるときもみんなで負ける。(試合に)出てる出てない関係なく、そういうチームでありたいね。あのー、うん、やっぱり、そしたら、気持ちいいっすよ、うーん、そしたらやってて良かったねって思うしね、うん、そういう、そういうチームをつくる指導者でありたいし、そういうチームをつくっていきたいって思いますね。」(指導者B)

「で、さっきも言ったけど、問題が起きたり、色々します。で、そうすると人って、例えばなんかあってこう、こういう(身を引く動作をして)、敬遠しがちじゃないですか、そうじゃない、って話をします。例えば私が何かをして、引かれる、でもそうじゃない、どうケアして、まず助ける、声をかける、叱る。でも、その時に絶対見捨てない。引き上げる。で、その子がまた気付いてよくなれば、もうそれで、オッケーなんだから、あの、まぁ、罪を憎んで人を憎まず、じゃないけど、(中略)、そういう絆をね、しっかり持って欲しい、っていうのがありますね。さっきも言った、見捨てちゃダメ、仲間を見捨てたら、絶対勝てない。」(指導者B)

指導者Bは、チームはファミリーであるという発想を持ち、選手間、学生間の縦と横の繋がりを大切に、チーム全体で同じ方向に進んでいくことの重要性を指摘した。また、このような凝集性について、指導者Aは、チームとしての結束の程度が練習の質に大きく影響を及ぼす点を指摘した。練習場面において、選手は指導者の指示や説明に対して、共通の注意を向け、高い集中が共有された雰囲気の中で練習をすべきであると述べられた。このように、チームの強い結束や統合を表す凝集性を重視する指導者の考えが示された。

(7) 戦術・戦略

このカテゴリーでは、チームオフェンス、チームディフェンス、コンバージョン、個人スキル、原理・原則に基づいた戦術、合理的な戦略、という、バスケットボール

の競技特性を総括した考え方やチームの戦術・戦略に対する価値観について記述した。例えば、指導者Cはチームオフェンスについて次のように述べた。

「例えば、うちが採用してるのは、2ガード、4アウトにして、1センターにするんだけど、縦にパスしたらカットする。パスしたらスクリーンしなさい。もう、すごい最小限...」(指導者C)

指導者Cは、バスケットボールの面白さの1つである相手との駆け引きを大切にしながら、オフェンスのルールは最小限に設定することで、チームとして明確な優先順位を示す戦術の重要性を指摘した。一方、チームディフェンスについて、指導者Bは次のように述べた。

「私は、もうさっき言った通り、ディフェンスチームをつくるタイプですから、ディフェンスだと思います。ディフェンスで、この1つの考えの中にあるのが、大きさでは日本は断然ちっちゃいですよね、でその時に、あのー、ゴール下に近付けば、高さが有利、になりますよね。ってことは、近づけさせる時間を短くしなけりゃいけない。ということは、フルコートからプレッシャーを、平面でもう、ボールを簡単に攻めさせない...」(指導者B)

指導者Bは、チームディフェンスを重視することに加え、日本人選手と外国人選手との体格差を、自身が指導するチームに置き換えて戦術を考案していた。つまり、指導者は、不利な状況で、合理的な戦略に基づいて、論理的な戦術を立てる発想を持っていたことが明らかになった。また、このような合理的な戦略について、指導者Dは次のように述べた。

「日本のこういうこう、比較的、あのー、体格的にあんまり、ね、有利でない状況をどういう風に打破していくかっていう、自分のチームも実際そうだったから、大きい子いなくて、あのー、上手な子、そんなにいなくて、でー、何を鍛えていったら、あれするんだろうか、それを突き詰めていったら、日本の戦い方に繋がるんじゃないかなと...」(指導者D)

このように体格や身体能力などの側面で不利である状況を、根拠を持った意図的な戦略によって有利な状況に転じるために戦術・戦略の重要性が発話データから示された。

第2節　指導哲学の形成過程

指導哲学の「形成過程」の中では(1)「モデル」、(2)「経験」、(3)「個人要因」、(4)「環境要因」の4つの大カテゴリーが生成された(図3)[註1)]。以下、インタビューの発話内容と対照させながら、各カテゴリーの主要な内容について記述した。

- モデル
  - 模範となるモデル(A,B,C,D)
    - 模範となる指導者(A,B,C,D)
      - 選手時代の指導者(B,C,D)
      - アシスタント時代の指導者(A,D)
      - 外国人指導者(B,C,D)
      - 複数の指導者(B,C,D)
    - 模範となるチーム(B)
    - 大学創始者の考え(A)
    - 偉人の格言(B)
  - 模範にならないモデル(A)
    - 模範にならない指導者(A)
    - 模範にならない先輩(A)
- 経験
  - 指導者としての経験(A,B,C,D)
    - 指導者としての成功(A,B)
    - 指導者としての困難(A,D)
    - 国体の指導経験(C)
    - 国際大会の指導経験(D)
    - 日本人指導者のアシスタント経験(D)
    - 外国人指導者のアシスタント経験(D)
    - 指導者経験の蓄積(D)
  - 選手としての経験(A,B,D)
    - 実業団の選手経験(B)
    - リストラされた経験(B)
    - チームリーダーとしての経験(B)
    - プレーすることの重要性(D)
    - 選手時代の考え(A)
  - 指導以外の経験(B,D)
    - 指導以外のアルバイト経験(D)
    - バスケット以外の経験(B)
    - 指導現場を持てない経験(D)
  - コーチ留学(B,D)
- 個人要因
  - バスケットボールへの情熱(B)
  - バスケットボールの感覚(A)
  - 指導者として自信(A)
  - 指導者になる目標(D)
  - 指導者としての気付き(D)
- 環境要因
  - 挑戦できる環境(D)

図 3　形成過程のマップ

註 1)　指導者それぞれの発話結果の個別性や共通性を明記するために、指導者 A から指導者 D を意味する発話結果の表記を括弧内に示した。

例　指導者 A と B が発話した場合は、(A,B)と記載。

(1) モデル

このカテゴリーでは、模範となるモデル、模範にならないモデル、という指導哲学の形成に影響を与えた人物やチームなどについて詳述した。特に4名の指導者全員が、指導哲学に影響を与えた人物としてアシスタント時代の指導者を挙げた。また、3名の指導者が、選手時代に関わった指導者について言及した。例えば、選手時代の指導者について、指導者Cと指導者Dは次のように述べていた。

「色々、やっぱりこう、僕のバックボーンというか、やっぱり、小学校からずっと指導者がいるわけだから、それぞれの指導者に影響を受けたと思う」(指導者D)

「私はやっぱり現役時代に関わったコーチはすごく、えー、やっぱり、影響を受けていて、3人いるんですけど」(指導者C)

この発話が示す通り、各年代で指導を受けてきた指導者や複数の指導者の考えが、現在の指導に対する考えを構築するきっかけになった点を指摘した。また、このような複数の指導者について、指導者Bは次のように述べた。

「いろんな人に哲学を教わりました。ですから、それで最後、(外国人指導者F)さんになるんですけど、まぁ(外国人指導者G)さんとか色んな方がいるんですけど、やっぱりその、そういう色んな指導者の方に教わったことが良かったと思っています。」(指導者B)

指導者Bは、各競技カテゴリーで出会った複数の指導者や実業団時代に指導を受けた外国人指導者の存在について言及した。その中で、具体的にどんな影響を受けたのかという質問に対し、指導者Bは次のように述べた。

「やっぱ、高校の指導を受けたH先生は、あのー、ホント温和な方だったんですけど、(部員が)9人しかいなかったんです。で、忙しい方だし、あのー、主任、教務主任もされてたと思うんですけど、でも来た時は(練習に)入ってくれて、5対5をやってくれたり、一緒にやったり、あとはね、そのー、自分で教えきれないと思ったら、その

我々、いいメンバーも揃ってたんで、合宿に連れてってくれる、だんだん、(レベルの高いチームに)連れてってくれるんですよ、ステップアップして。それも、自分の保険を解約して。だから、そういう愛情というか、人情味、は、A 先生に教わった」
(指導者 B)

指導者 B は、選手個々との関わり合いを大切にし、チームや選手との関係性を築くことを重視する共同関係を指導哲学の 1 つとして挙げた。上述した人間味溢れる指導者に教えを受けたことや各競技カテゴリーで出会った人間的な関わり合いを重視する指導者と出会ったことが現在の指導哲学の構築に影響を及ぼしていた可能性が示唆された。その一方で、望ましくない影響を受けた模範にならないモデルについて、指導者 A は次のように述べた。

「だから、中学とか高校時代につまらない練習をやらされたから…」(指導者 A)

指導者 A は、模範とならないモデルが指導哲学の形成に影響を与えた点について言及した。この発話は、勝つために必要だと考えられる基礎練習を実践していなかった模範とならない指導者について示したものである。これを受け、指導者 A は、バスケットボールの原理原則に基づいた理論的な練習を選手に提示し、考えられる基礎練習を徹底して指導することが重要であるという考えを持つようになった。模範にならないモデルの下で選手時代を過ごした経験が、根拠を持った理論的な指導を重視する指導哲学を構築するきっかけになっていた可能性が示された。また、4 名の指導者がアシスタント時代に、大学、実業団、プロなどのトップレベルの指導者から細分化された練習や計画的・体系的な練習プログラムを見聞する学習機会を持っていたことが明らかになった。そして、このようなトップレベルの指導者の影響が指導哲学の形成に影響を与えていた点が示唆された。例えば、大学チームのアシスタントコーチをしていた指導者 A は、アシスタント時代の指導者について次のように述べた。

「大学の女子のチームを見た時に、指導に加わった時に、まぁ今からいうと、そのディフェンスは神業じゃない、ここからこういう風に動いて、こう抑えるぞということが人間業じゃできないんじゃないというところを実際にやるわけよ、練習をね。そう

すると、あぁやっぱり考え方をきちっと整えて、整理していかないとああいう論理にたどり着かないよね。神業だと思っているプレーを一生懸命考えて指導している人がいるということは、やっぱりそれは(意図的に)そうなるんじゃないのと…」
(指導者 A)

このように、指導者 A は、大学チームのアシスタント時代に出会った指導者から、筋道を立てて系統的に整理された練習を実践することの重要性や、バスケットボールの原理原則に基づいた理論的な指導の必要性を学んだことを示した。また、3 名の指導者がコーチ留学や国際大会など海外のバスケットボールについて見聞する学習機会を持っていたことを示した。アメリカで出逢ったある外国人指導者について、指導者 C は次のように述べた。

「私、アメリカ行ったときも、あのー、1 つ目のチームで(アメリカのプロチーム)行った時に、あの時は女性のヘッドコーチと女性のアシスタントともう 1 人コーチがいて、で、あのー、ビデオルームに常に彼女がいて、スナックとかいっぱい置いてあって、でビデオを観ながら、多分、ああでもない、こうでもないってやってて。あれはすごい、こう、コーチングとしてすごい理想像だなって思って…」(指導者 C)

これは、アメリカのトップチームのヘッドコーチやアシスタントコーチらが、ビデオルームでお互いの意見を交わし、議論していた様子を見たことが自身の指導哲学に影響を与えたことを表した発話である。指導者 C は、現在のチームを指導する上で、アシスタントコーチと意見を交わすことや学生スタッフと連携することを重視する指導哲学を持っていた。このような指導哲学を持った背景には、上述したトップレベルの外国人指導者のようなモデルが存在していたことが明らかになった。

(2) 経験

このカテゴリーでは、指導者としての経験、選手としての経験、指導以外の経験、コーチ留学、というそれぞれの指導者のあらゆる経験について、指導哲学に影響を与えた経験を示した。例えば、選手を指導していく中で培った成功経験や困難な経験などを総括した指導者としての経験について、指導者 A は次のように述べた。

「それで、大学1年の時に、自分の卒業した中学生を夏2か月、7月の20日位から9月くらいまで教えて、で学校へ帰って来て、県大会のこういうのがあるので帰ってきてくださいというので、帰って、まぁ、ベスト4に入って、ということをやった。
で、その時にやった練習というのが、やっぱり、相手がこういう風にやるから、我々はできませんという子供たちに、いやいや、(中略)、こうやったら、解決ができるはずだよと。だからこういうプレーをやるよ、ということを教えた時に、それが上手くいって。まぁ一発で県のベスト4までいっちゃったというのが、実は大きなきっかけ。」(指導者A)

指導者Aは、大学生時代に母校の中学生を指導する機会を持つことになった。ヘッドコーチとして初めてチームを指揮する中、自身が考案した順序立てた練習や論理的な指導を実践し、公式戦でベスト4という成果を出した。このような指導者としての成功経験が、指導者Aのバスケットボールの指導に対する自信へと変わり、論理的に順序立てて、理論的な指導を実践するという指導哲学を確立するきっかけになった点が示された。また、このような、指導に対する自信に関して、指導者Bは指導者としての成功の中で次のように述べた。

「当然、I(現在の指導チーム)でもそうだし、で、I(現在の指導チーム)はどんどん良くなってる、どんどんチームになってる。うん。あのー、そうそう崩れないと思う。まぁ、これから、彼らを楽しみにしていてください。(中略)、大エースが骨折でいなくなってるこの後が、私は絶対面白いと思う...」(指導者B)

チームの得点源であるエースがケガで負傷した中でも、現在のチームを作り上げてきた成功経験が指導者としての自信となっている発話である。このような指導者としての成功経験の蓄積は、指導哲学を確立する上で重要な要素である点が示された。その一方で、指導者としての困難な経験について、指導者Dは次のように述べた。

「それはね、その、技術的な部分だけではなくて、そのリクルートにも関わってくる。そういうのは、最初から名前ある人たちは、何も言わなくても、あぁJ(有名な選

手だった指導者)さんだ、K(有名な選手だった指導者)さんだって分かるけど、僕の場合は、誰ってなっちゃうから、(選手を)誘っても。今はまぁね、L大学(現在の指導チーム)って少し、ちょっと、あの一、上位の方にいるから、ちょっと見てもらえるようになったけど。やっぱ、難しい部分は、最初の方はあったと思う」(指導者D)

指導者Dは、選手として周囲から認められるような実績がなかったため、リクルートで苦労した経験が、指導者として学び続ける学習志向や指導スキルを向上させる動機づけに繋がっていた点を言及した。このような指導者としての困難な経験も自身の指導哲学を構築する際に影響を与えたことが、発話から示された。一方、指導者としての経験だけでなく、選手としての経験が指導哲学の形成に寄与していた点も示された。例えば、選手としての経験について、指導者Aと指導者Dは次のように述べた。

「やっぱり自分がプレーをしている時に、こういう風になりたいよねというのが、やっぱりあるんですよ。原点にね。」(指導者A)

「考えながらっていうか、自分がやってみないとやっぱり、色んなこと分からない」(指導者D)

このような指導者Aや指導者Dの発話が示すように、選手としてプレーしていた経験は、指導を実践する判断材料になっていることや実際にプレーすることで分かる気付きを重視する考えを持っていたことが明らかになった。一方、バスケットボールの指導とは別に、指導現場以外の経験の中で、指導現場を持てない経験が指導者としてのキャリアを大きく変える転機となっていた点が示された。このことについて、指導者Dは次のように述べた。

「現場に空きがなくて、市役所に配属だったのね。で、市役所で、あの一、まぁ事務をやってて、まぁ、教育委員会の事務をやってたりだとかして、で、次、2年間経った後、空きができたっていうところが、まぁ、国立の教育大学付属中学校というところ。そこはもう、教科教育専門のもう、研究授業ばっかりやるようなところで、部活動なんか、ちょっと出来るような学校ではないので、それはもう、すごくちょっとシ

ョックで。自分はもうバスケットを教えたくて、それは授業ももちろん、あれだけど、そんなつもりはないと思ってた時に、そういう内示が出て、これはどうしようもないと思って、じゃあ僕もう辞めますと...」(指導者 D)

指導者 D は、バスケットボールの指導を目指して中学校の教員になったが、市役所に 2 年間勤務することになった。その後教員を辞め、コーチ留学を決意することになった。本研究では、コーチ留学を経験した 2 名の指導者が、バスケットボールの環境から一時的に離れる期間や経験を経て、コーチ留学を決意していたことが示された。指導者 B は、コーチ留学を決意することになった経緯について、次のように言及した。

「選手 15 年目に、M(実業団)でプレーしてたんですけど、リストラになりましたクラブが。 で一、その後に、えーっと、ホントはね、とある新設大学に呼ばれて行こうと思った、それはね時期尚早になったの。だから仕事をすることになりました。で、M(実業団)で仕事をしてて、もう課長だったんで、ホントに仕事をどんどん、1 年半、約 2 年くらい仕事をやってたんだけど、39(歳)の時かな 40(歳)になる時の前に、えー、孔子の教えで(笑みを浮かべる)、40 にして惑わずと。で、その時にすっごい、バスケはいいのか、バスケはいいのか、心の声があったんで、辞めてアメリカに行きました。だから、課長職を捨てて、その時、やっぱり、バスケのコーチになりたいっていうのがありましたね。だから本当に 39(歳)の時かなぁ...」(指導者 B)

指導者 B は、バスケットボールの指導者を目指すため、40 歳にしてアメリカにコーチ留学することを決意した。その後、留学先の外国人指導者から、「選手は機械ではなく、人間である(Players are not a machine, player is human)」という教えや綿密にプログラミングされた体系的な練習、そしてバスケットボールを通して人格形成を促す姿勢に強く影響を受けた。このようなコーチ留学を通した包括的な経験が、現在の指導哲学の形成に寄与したことが明らかになった。また、同様に指導者 D は、コーチ留学の依頼の手紙を、国内のある指導者に送ったことを機にコーチ留学が実現した。このコーチ留学の経験ついて、指導者 D は次のように述べた。

「いやぁ、もう。当時、そのアメリカってそんな練習しないだろうみたいな、そんな勝手なあのー、何て言うのかぁ、自分の意識で行った、思い込みで行ったんだけど(短い沈黙)。もう、日本人。練習してないなって思ったもん。それぐらい練習してた。うーん、トレーニングも含めてね。」(指導者 D)

「5 時半から練習だったら、4 時半くらいからもう、(コーチングスタッフが)体育館に来てるんだもん。それでもう練習のシミュレーションみたいなことやる。スタッフがやっぱ、10 何人いるから。でも、本気、本気で練習すんだよ、コーチングスタッフも。で、あのー、エクイップメント(equipment)マネージャーって言って、僕なんか、やらしてもらって、用具係みたいなマネージャー。ボールここで、タオルここで、飲み物ここで、そんな位置もシミュレーション。この練習の時は、ここみたいな...」(指導者 D)

指導者 D は、コーチ留学によってアメリカのバスケットボール事情の実態を見聞した。世界のトップレベルに位置するアメリカには、国内では見受けられない練習環境やコーチングスタッフの充実、そして組織的かつ計画的に準備された練習があることを学んだ。このようなバスケットボールの先進国アメリカでコーチ留学を経験したことで、海外のチームとの比較からチームの戦略を考える発想、選手がバスケットボールに集中できる環境づくり、基礎を反復する心理的スキルの重要性、そしてそのような努力とより効果的な指導を考え続ける継続的な学びの姿勢が、現在の指導哲学を形成することに繋がった可能性が示された。

(3) 個人要因

このカテゴリーでは、バスケットボールへの情熱、バスケットボールの感覚、指導者としての自信、指導者になる目標、指導者としての気付き、という指導者自身のバスケットボールに対する感覚や目標などの個人的な影響の要因について記述した。例えば指導者 A は、バスケットボールの感覚について次のように述べた。

「だから、動く人間に対して、ここへ投げれば当たるよね、というのが映像としていつも分かりながら投げていた。そういうのをちょっと思い出すこともあって、あぁやっぱりそこら辺がバスケットの原点になっているのかなぁという気がする」
(指導者 A)

これは、指導者 A が小学生時代に行っていたドッジボールの経験を内省する個別性の高い特徴的な発話である。このような回顧が、バスケットボールのパス練習や空間把握能力の養成など身体的なスキルの獲得に向けた練習に対する考え方に影響を与えた可能性が指摘された。また、指導者 D は、国際大会の指導経験や選手の成長をきっかけに、これまで設定していた目標を振り返る機会を得た。そのような指導者としての気付きについて、指導者 D は次のように述べた。

「だから、目標がちょっと、今まで小さ過ぎたんじゃないかぁって、ふと考えて。うん、だから、もっと高いことを要求していいんじゃないかな、選手にね。で、そういうところを目指してほしいっていうのが、(一呼吸して) 出てき始めて...」(指導者 D)

指導者 D は、現在指導している選手やチームが高いレベルで活躍するようになっていく過程で、選手に課していた目標が小さかったことに気付き、大学リーグで活躍するだけでなく、実業団やプロ、そして国際大会など世界基準の選手の育成を目指す指導哲学を持つようになった。このような異なる環境の中で指導をする機会や外部からの刺激が指導者としての気付きを促し、指導哲学を見直すきっかけになった可能性が示された。

(4) 環境要因

このカテゴリーでは、挑戦できる環境という、指導者を取り巻く環境的な要因による影響ついて記述した。この点について、指導者 D は次のように述べた。

「僕は恵まれてたというか、大学でやり始めた時にまだ、N(大学)に O 先生がいて、P(大学)に Q 先生、やっぱ大御所がずーっといて、日本をこう、引っ張って行った 2 人がいたので、その人たちに挑戦できた、5、6 年は挑戦できたっていうのがあって。

もう、その時ね、(対戦相手の指導者の年齢が)60 越えてて、絶対倒すんだみたいな、こう、目標がもうはっきりしてたっていうか…」(指導者 D)

このように、指導者を取り巻く環境的な要因が指導者の期待や目標に対する考え方に影響を与えていた点を示した。また、その他にも、大学からヘッドコーチとして辞令が出たことや仕事を辞めることになったきっかけやタイミングが、指導者としてのキャリア形成に影響を与え、それらが自身の指導哲学を形成することに繋がった点が示された。

第 3 節　指導哲学と形成過程モデル

以上のように、大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程について、その図式化したモデルを図 4 に示した。指導哲学に関しては、「指導への取り組み」、「指導の観点」、「指導者として必要なスキルと特徴」、「選手として必要なスキルと特徴」、「選手との関わり方」、「チームの在り方」、「戦術・戦略」の 7 つの大カテゴリーから構成され、形成過程については、「モデル」、「経験」、「個人要因」、「環境要因」の 4 つの大カテゴリーがそれらの指導哲学に影響を与えたという結果が示された。図 4 で示したように、形成過程は 4 つの大カテゴリーが先行要因となり、総括的に指導哲学に影響を与えていることを矢印で示した。

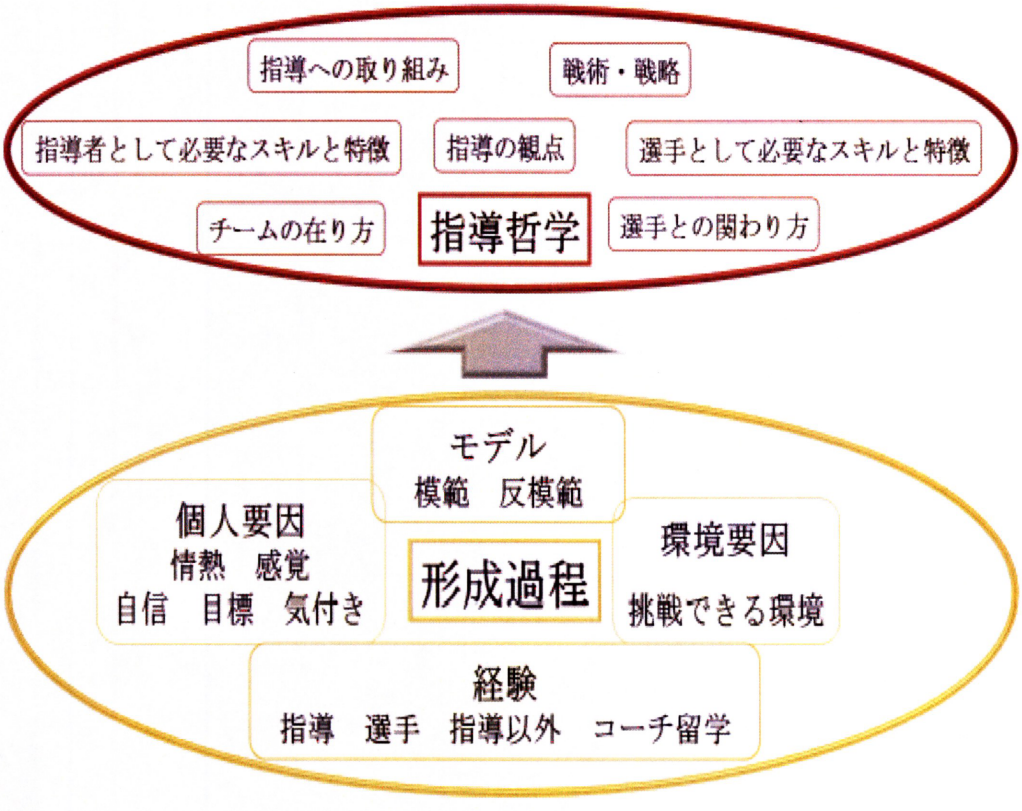

図 4　指導哲学と形成過程の関係図

第6章　考察

第1節　研究の意義

本研究の目的は、Horn[28]のワーキングモデルに則り、大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程について明らかにすることであった。分析の結果、大学バスケットボール指導者の指導哲学は、「指導への取り組み」、「指導の観点」、「指導者として必要なスキルと特徴」、「選手として必要なスキルと特徴」、「選手との関わり方」、「チームの在り方」、「戦術・戦略」の7つの要素によって構成されており、形成過程においては、「モデル」、「経験」、「個人要因」、「環境要因」の4つの要素によって構成されていることが明らかになった。本研究では、バスケットボール指導者の指導哲学の詳細や、指導哲学に影響を与える要因を明らかにし、Horn[28]のワーキングモデルを発展させる知見を得た。

本研究で示された指導哲学は、選手の可能性を最大限に引き出すことを重視していた。また、自主性・自発性を促す支援的な関わりによって選手を動機づけ、選手の人間的な成長を考える信念が示された。「指導への取り組み」や「指導の観点」の中でも、選手の潜在的な資質や能力を引き出すことが重要視されていた。さらに、チームとして明確な目標を示すと同時に、選手個々に大学でバスケットボールをすることの意義や目的を考えさせ、選手の内発的な動機づけを高めるような支援的な関わりを大切にする考えが示された。本研究では、競技レベルの高い大学バスケットボールチームの指導者を対象にしたが、前述した高校チームの指導者[31]と同様に、結果のみを重視する成果目標(performance goal)に限定することなく、選手の努力やプロセスに焦点をあて、選手個々のスキル獲得に向けた熟達目標(mastery goal)[19]を重視する指導哲学が示された。このような熟達目標は、成果目標に比べ、選手の内発的動機づけを高めることや挑戦する姿勢、有能感を高める報告がなされており、本研究の結果を支持する報告がなされている。

また、指導者は身体的・心理的スキルの向上による試合場面でのプレーパフォーマンス発揮を重視するだけでなく、選手の人格形成やライフスキルの獲得を目指す指導哲学を示した。Weiss et al[7]は、(1)挨拶(Meeting and Greeting)、(2)感情のコントロール(Managing Emotions)、(3)目標設定(Goal Setting)、(4)課題解決(Resolving Conflicts)、(5)健康管理(Making Healthy Choices)、(6)多様性への理解(Appreciating Diversity)、(7) 援助希求(Getting Help From Others)、(8)他者支援(Helping

Others)、の8つの要素がライフスキルとして妥当である点を検証している。本研究でも、選手の人間的・社会的な成長を促す働きかけとして、基本的なルール(挨拶や授業への取り組みなど)を遵守させること、ミーティングで選手一人ひとりに考えを主張させる機会を与えること、選手の自立や自律を中心に据えた指導行動の選択、などの指導哲学が示され、先行研究と類似する報告がなされた。特に、本研究では、試合の重要な場面で実力を発揮することや困難な状況を打破するなどのメンタルタフネス[37]が、バスケットボールのプレーパフォーマンスに寄与するだけでなく、社会生活にも役立つスキルである可能性が示された。また、Mageau & Vallerand[26]は、指導者の民主的な行動が選手の内発的な動機づけを高める点を指摘している。内発的な動機づけを高めるためには、管理的な行動ではなく、選手を中心に据えた民主的な行動を主体とする考え方が重要である点が本研究でも示された。

一方、指導者の指導哲学の形成過程においては、模範となるモデルから正の影響を受けていた反面、模範にならないモデルからも影響を受けていたことが明らかになった。Sáiz et al[52]は、指導者の成長段階には、「模倣」(imitative practice)による学習や気付きを与える助言者(mentors)の役割が重要であることを示唆しており、本研究を類似した報告がなされている。

また、選手時代やアシスタント時代などの指導者固有の成功体験や困難な経験などの解釈、長期にわたる指導実践の蓄積が重要である点が示された。特に、4名の指導者は、模範となる指導者からある一定期間、緻密に計画された練習プログラムもしくは、細分化された練習を見聞する経験や学習機会を有していたことを示した。Ericsson[20]は、専門的なスキルを向上させるためには、才能だけでなく、質の高い熟考された練習(deliberate practice)が重要である点を指摘している。また、Sáiz et al[52]は、指導者の熟達過程には、よりよい指導への探究や指導に献身的に専念する過程が重要である点を指摘している。本研究でも、指導哲学の形成には、経験を通して自身の指導実践を熟達させていくプロセスが重要である点が示された。

また、バスケットボール指導者は、継続的且つ高い学習志向を有しており、国内のみならず、海外のバスケットボールから知見を得ることで、世界基準の選手の育成や日本のバスケットボールの競技力向上などの俯瞰的且つ長期的な観点を持っていた。例えば、ある指導者は、国際大会の指導をきっかけに、世界と戦うために必要なスキルの獲得や合理的な戦術・戦略を考えるようになり、それによって世界に通用する選

手を育成することが目標になった点を主張している。その他にもコーチ留学を機に、定期的に海外へと出向き、外国人指導者の教えや国際試合の視察など国内から国外に学びの場を広げたことが指導哲学の形成に大きく寄与していたことが示された。また、指導者として挑戦できる環境的な要因も、指導者の学習志向を喚起する要因になっていた点が考えられる。先行研究[26)50)]で示されている通り、指導者を取り巻く背景や状況は、指導者の期待、価値観、目標を包括する指導哲学[28)]に影響を与えることからも、指導者の学習志向を促進させる環境要因が指導哲学の形成に正の影響を与える可能性が示唆された。

さらに、指導哲学は、多面的で幅広い要素から構成されているため、指導哲学の形成と蓄積には多くの時間を要することが示された。大学バスケットボール指導者は、長期間にわたる指導の実践の積み重ねと指導者として学び続ける学習志向、経験、モデルが自身の指導哲学の洗練と熟考に寄与していたことを示した。これまで、国内における研究では、指導行動を観察する研究や指導行動の直接的な要因となる指導者の期待、価値観、信念、目標などの指導哲学に関する研究が極めて限定的であった。特に、バスケットボールに関する研究では、戦術面や技術面など指導方法を対象にした研究が多く[32)48)46)47)]、指導者の行動がどのような意図によって生起されているのかといった指導哲学に関する知見は見受けられなかった。しかしながら、本研究によって、スポーツ指導者の指導哲学の詳細や、指導哲学に影響を与える要因が明らかとなった。

第2節　現場への提言

本研究は、若年指導者や指導経験が浅い指導者にとって、有効な情報源となる結果を提示した。特に、選手の人間的な成長やスキル獲得に向けたプロセスを重視する考え方、そして、スポーツの経験を通してライフスキルを育成する指導哲学は、さまざまな競技種目や幅広い競技カテゴリーにおいても応用が可能であると考えられる。

また、指導哲学の形成には自身の指導経験を熟考させるプロセスが重要である点に加え、指導者の経験や課題を他の指導者と共有する学習機会が指導哲学の更なる発展に寄与する可能性が示された。スポーツ指導者の養成においては、指導者それぞれの経験や現場での課題を指導者同士で共有し合い、課題解決に向けた議論や意見交換を目的とした学びの場と、指導者の気付きや自己認知を促す学習機会が重要であると考

える。そのような指導現場以外の学習機会は、指導者の学びに対する意欲を喚起することが期待されることから、今後は、コーチライセンス制度との関連を図り、組織的且つ継続的に、指導者同士の意見交換や自己認知を促す講習会や研修を展開していく必要がある。

第3節　研究の限界と今後の課題

本研究では、いくつかの課題が残された。第1に、本研究はインタビューデータを主な分析対象にしており、大学バスケットボール指導者の指導哲学が実際の指導現場でどのように反映しているのかを観察できなかった点である。インタビューによって、指導者自身の経験への認知を深く理解することが可能であった反面、指導者は自身の行動を正確に認知していない可能性[56]が考えられる。よって今後は、指導哲学と実際の指導行動との違いを検証していく必要がある。Tharp & Gallimore[24]は、大学バスケットボール指導者 John Wooden の練習や試合場面における発話の頻度を観測する研究を行い、成功した指導者の特徴として、選手に高頻度なフィードバックを行っていた点を明らかにした。また、Becker & Wrisberg[3]は、大学の女性ヘッドコーチとして最多勝を挙げた Pat Summit の指導行動を観測し、選手に対する期待と発話の頻度を検証する研究を行っており、本研究においても、指導哲学が実際の指導行動としてどのように反映されているのかという観点から研究を進めていく必要がある。

第2に、本研究では、指導者の経験を理解することに焦点を絞っていたため、選手やチームスタッフが指導者の指導哲学をどのように認知しているのかという点に関しての知見は得られていない。発話データの中でも、指導者は、選手と共同関係を結びながら、個々とのコミュニケーションを図り、学生スタッフやアシスタントコーチと連携することが重要である点を示した。Benni & O'Connor[5]は、プロチームのヘッドコーチ、アシスタントコーチ、選手にインタビュー調査を行い、指導者と選手が引退後のキャリアを見据えたライフスキルの育成を重視する考えを持っていた点を示している。今後は、選手やチームスタッフにインタビュー調査を行い、指導者の指導哲学を多角的な観点から検証する必要がある。

第3に Horn[28]がワーキングモデルで示した社会文化的背景や組織の雰囲気などの、指導者を取り巻く環境が指導哲学に与える影響についての検討が必要である。研究対象者4名の雇用形態は、大学教員、コーチ、事務職員と様々であった。特に、大学教

員 2 名の発話の特徴としては、部活動と学業の両立や組織の帰属意識を醸成するなどに主眼が置かれていた点が挙げられた。一方、雇用形態がコーチや事務職員であった 2 名の指導者は、ライフスキルの育成やチームとして基本的なルール(挨拶や授業への取り組みなど)を遵守するという指導の観点を持っていたが、選手のプレーパフォーマンス向上や試合場面での実力発揮をより重視する傾向が見受けられた。今後は、Horn[28]のワーキングモデルが示す通り、社会文化的背景や組織の雰囲気などの雇用形態や勤務実態、チームや保護者、地域との関係性など、指導者を取り巻く環境に着目し、指導哲学とその外因的な環境の関係性を検証する必要がある。Pelletier et al[50]や Mageau & Vallerand[26]は、指導者を取り巻く組織の環境が、指導者の考え方や行動を変容させる可能性がある点を指摘している。本研究の結果は、指導哲学に影響を与える外因的な要素について明らかにすることの重要性を示唆している。

第7章　結論

バスケットボールにおいて、指導者の存在が競技力向上に不可欠である[59]。また、指導者の養成に関して、戦術や技術に関する知識と同様に、指導者自身の指導哲学を確立させることが重要である[39]。これまで、バスケットボールの競技力向上に関して、戦術や技術などの指導方法に関する研究は盛んに行われてきたが[29)32)46)47)48)66)]、バスケットボール指導者を対象にした指導哲学に関する研究やその形成過程に着目した研究は、国内外においても見受けられなかった。本研究では、Horn[28]のワーキングモデルに則り、大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程を明らかにした。その結果、大学バスケットボール指導者の指導哲学は、試合場面でのピークパフォーマンス発揮のみならず、選手の人格形成にも焦点をあてていることが示された。また、指導哲学は、多様な要素で複雑に関わり合いながら構成されていることが示唆された。さらに指導者には幅広い役割が求められることから[25]、指導哲学の形成には多様な要因が関わり、また多くの時間を要する点が示された。今後は、指導者の養成に関する知見を蓄積するためにも、指導行動の検証や選手やチームスタッフの認知などの観点から指導哲学の研究を進める必要性が示唆された。

引用・参考文献

1) 阿部哲也, 木葉一総. (2011). 詳解バスケットボールのルールと審判法.東京,大修館.

2) Amorose, A, J. & Horn, T, S. (2001). Pre- to Post-Season Changes in the Intrinsic Motivation of First Year College Athletes:Relationships with Coaching Behavior and Scholarship Status. Journal of Applied Sport Psychology. 13, 355-373.

3) Becker, A, J. & Wrisberg, C, A. (2008). Effective Coaching in Action: Observations of Legendary Collegiate Basketball Coach Pat Summitt. The Sport Psychologist, 22, 197-211.

4) Becker, A, J. (2009). It's Not What They Do, It's How They Do It: Athlete Experiences of Great Coaching. International Journal of Sports Science & Coaching. 4, 1.

5) Bennie, A. & Connor, Donna, O'C. (2010). Coaching Philosophies: Perceptions from Professional Cricket, Rugby League and Rugby Union Players and Coaches in Australia. International Journal of Sports Science & Coaching. 5, 2, 309-320.

6) bj リーグ公式サイト: http://www.bj-league.com/

7) Camiré, M, & Trudel, P. & Forneris, T. (2012). Coaching and transferring life skills: Philosophies and strategies used by model high school coaches. The Sport Psychologist. 26, 243-260.

8) Chelladurai, P. (1978). A contingency model of leadership in athletics. Unpublished doctoral dissertation, University of Waterloo, Waterloo, ON.

9) Chelladurai, P. (1990). Leadership in sports: a review. International Journal of Sport Psychology. 21, 328-354.

10) Chelladurai, P. (2007). Leadership in sports. In G. Tenenbaum & R. C. Eklund(Eds.). Handbook of sport psychology. 113-135. New York: Wiley.

11) Côté, J. & Salmela, J, H. & Baria, A. & Russell, S,J. (1993). Organizing and Interpreting Unstructured Qualitative Data. The Sport Psychologist. 7, 127-137.

12) Côté, J. & Salmela, J. & Trudel, P. & Baria, A. (1995). The coaching model: A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge. Journal of Sport & Exercise Psychology. 17, 1, Mar, 1-17.

13) Cresswell, J, W. & Miller, D. (2000). Determining validity in qualitative inquiry. Theory Into Practice. 39, 124-130.

14) Cresswell, S, L. & Eklund, R, C. (2005). Motivation and burnout among top amateur rugby players. Medicine and Science in Sports and Exercise. 37, 3, 469–477.

15) Dale, G, A. (1996). Existential phenomenology: Emphasizing the experience of the athlete in sport psychology research. The Sport Psychologist. 10, 307-321.

16) Deci, E, L. & Ryan, R, M. (1980). The empirical exploration of intrinsic motivational processes. In Advances in Experimental Social Psychology. 13, (edited by L.Berkowitz). 39-80. New York: Academic Press.

17) Deci, E, L. & Ryan, R, M. (2000). The "what" and "why" of goal pursuits: Human needs and the self-determination of behavior. Psychological Inquiry. 11, 4, 227-269."

18) Deci, E, L. & Ryan, R.M. (1985). Intrinsic Motivation and Self-Determination in Human Behavior. New York: Plenum Press.

19) Dweck, C, S. (1986). Motivational processes affecting learning. American Psychologist. 41,1040-1048.

20) Ericsson, K, A. & Krampe, R, T. & Tesch-Romer, C. (1993).The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. Psychological Review, 100, 3, 363-406.

21) Feltz, D.L., Chase, M.A., Moritz, S.E., & Sullivan, P.J. (1999). A conceptual model of coaching efficacy: Preliminary investigation and instrument development. Journal of Educational Psychology, 91, 765–776.

22) FIBA: http://www.fiba.com/

23) Freischlag, J. (1985). Team Dynamics Implications for Coaching. Journal of Physical Education, Recreation & Dance. 56, 9, 67-71.

24) Gallimore, R. & Tharp, R. (2004). What a Coach Can Teach a Teacher, 1975-2004: Reflections and Reanalysis of John Wooden's Teaching Practices. Sport Psychologist. 18, 2, 119-137.

25) Gilbert, W, D. & Trudel,P. (2004). Role of the Coach: How Model Youth Team Sport Coaches Frame Their Roles. The Sport Psychologist. 18, 21-43.

26) Gould, D. & Carson, S. (2008). Life skills development through sport: Current status and future directions. International Review of Sport & Exercise Psychology. 1, 58–78.

27) Gould, D. & Carson, S. (2010). The relationship between perceived coaching behaviors and developmental benefits of high school sports participation The Hellenic Journal of Psychology. 7, 298-314.

28) Horn, T, S. (2008). Coaching effectiveness in the sport domain. Advances in sport psychology (3rd ed). 239–267. Champaign, IL: Human Kinetics.

29) 石橋千征, 加藤貴昭, 永野智久, 仰木裕嗣, 佐々木三男. (2013). バスケットボール戦術下でのリバウンド行為中における熟練者の視覚探索活動スポーツ産業学研究. 23, 1, 45-53.

30) Isoard, G, S. & Guillet, D, E. & Lemyre, P, N. (2012). A prospective study of perceived coaching a style on burnout propensity in high level young athletes: Using a self-determination theory perspective. Sport Psychologist. 26, 2, 198-282.

31) 北村勝朗, 齋藤茂, 永山貴洋. (2005). 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか? 質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. スポーツ心理学研究. 32, 1, 17-28.

32) 幸嶋謙二. (2008). バスケットボール競技におけるバック・カットに関する考察. バックドア・オフェンス理論的基盤の検討-. 国際経営論集. 35, 49-61.

33) 蔵元彩, 鈴木淳. (2013).バスケットボールにおける一貫指導システムの現状と課題. -サッカーの一貫指導システムとの検討-. 福岡教育大学紀要. 62, 5, 111-118.

34) 栗林徹, 鎌田安久, 小野秀二. (1999). 岩手県におけるミニバスケットボールの技術指導カリキュラムに関する試案. サッカーの指導カリキュラムを参考にして. 岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター研究紀要. 9, 73-92.

35) Kvale, S. (1996). Interviews: An introduction to qualitative research interviewing. Thousand Oaks, CA: Sage.

36) Lofland, J. (1971). Analyzing Social Settings. Belmont, CA: Wadsworth Publishing Co.

37) Madrigal, L. & Hamill, S. & Gill, D, L. (2013). Mind over matter: The development of the mental toughness scale (MTS). The Sport Psychologist. 27, 62-77.

38) Mageau, G, A. & Vallerand, R, J. (2003). The coach–athlete relationship: a motivational model. Journal of Sports Sciences. 21, 883–904.

39) Martens, R. (2012). Successful coaching (4th ed). Champaign, IL: Human Kinetics.

40) 文部科学省:2020年東京オリンピック・パラリンピックの概要. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/gijiroku/__icsFiles/afieldfile/2014/08/13/1348626_10.pdf

41) Moustakas, C. (1994). Phenomenological research methods. Thousand Oaks, CA: Sage.

42) Myers, N, D. & Vargas-Tonsing, T, M. & Feltz, D, L. (2005). Coaching efficacy in intercollegiate coaches: sources, coaching behavior, and team variables. Psychology of Sport & Exercise. 6, 129–143.

43) NBL (National Basketball League of Japan) : http://www.nbl.or.jp/

44) 日本バスケットボール協会: http://www.japanbasketball.jp/jba/conduct/

45) 日本バスケットボール協会. (2011). バスケットボール競技規則. http://shinpan.bitter.jp/pdf/2011-kisoku.pdf

46) 大高敏弘,吉田健司,内山治樹. (2007). バスケットボールのハーフコートオフェンスにおけるディフェンス戦術について. 大学体育研究. 29, 1-11.

47) 大高敏弘,吉田健司,内山治樹. (2008). 攻撃所要時間に着目したバスケットボールのハーフコート・オフェンスの検討. 大学体育研究. 30, 9-22.

48) 奥田知靖,大場渉,土井秀和. (2005). バスケットボールにおけるゲーム分析研究の現状と課題. 大阪教育大学紀要. Ⅳ, 54, 1, 203-212.

49) Patton, M, Q. (2002). Qualitative evaluation and research methods (3rd ed). Thousand Oaks, CA: Sage Publications.

50) Pelletier, L, G. & Séguin-Lévesque, C. & Legault, L. (2002). Pressure From Above and Pressure From Below as Determinants of Teachers' Motivation and Teaching Behaviors. Journal of Educational Psychology. 94, 1, 186-196.

51) Rowan, M., & Huston, P. (1997). Qualitative research articles: Information for authors and peer reviewers. Canadian Medical Association Journal. 157, 1442-1446.

52) Sáiz, S, J. & Calvo, A, L. & Godoy, S, J, I. (2009). Development of Expertise in Spanish Elite Basketball Coaches. International Journal of Sport Science. VOLUMEN V - AÑO V. 19-32.

53) Smith, R, E. & Smoll, F, L. & Curtis,B. (1979). Coach Effectiveness Training: A Cognitive-Behavioral Approach to Enhancing Relationship Skills in Youth Sport Coaches.

54) Smith, R, E. & Smoll, F, L. & Hunt, E.(1977). A system for tbe behavioral assessment of athletic coaches. Research Quarterly. 48, 401-407.

55) Smoll, F, L. & Smith, R, E. (1989). Leadership behaviors in sport: A theoretical model and research paradigm. Journal of Applied Social Psychology. 19, 1522-1551.

56) Smoll, F, L. & Smith, R, S.(2002). Children And Youth In Sport: A Biopsychosocial Perspective. ジュニアスポーツの心理学. 市村操一, 杉山佳生, 山本裕二訳. (2008). 大修館書店.

57) Stebbings,J. & Taylor, I, M. & Spray, C, M. & Ntoumanis, N. (2012). Antecedents of Perceived Coach Interpersonal Behaviors: The Coaching Environment and Coach Psychological Well- and Ill-Being. Journal of Sport & Exercise Psychology. 34, 481-502.

58) Tesch, R. (1990). Qualitative research analysis type and software tools. New York: Falmer Press.

59) 内山治樹. (2009).競技力の概念的把握への方法序説. 体育学研究. 54, 161-181.

60) Vallerand, R, J. (1997). Toward a hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. Advances in Experimental Social Psychology, 29, 271-360.

61) Vallerand, R, J. (2000). Deci and Ryan's self-determination theory: a view from the hierarchical model of intrinsic and extrinsic motivation. Psychological Inquiry. 11, 312-318.

62) Vealey, R, S. (2005). Coaching for the Inner Edge. コーチングに役立つ実力発揮のメンタルトレーニング. 徳永 幹雄訳.(2009). 東京,大修館書店.

63) Weiss, M, R. & Bolter, N, D. &Kipp ,L, E. (2014). Assessing Impact of Physical Activity-Based Youth Development Programs: Validation of the Life Skills Transfer Survey (LSTS). Research Quarterly for Exercise and Sport. 85, 3, 263-278.

64) Williams et al. (2003). Factor Structure of the Coaching Behavior Questionnaire and Its Relationship to Athlete Variables. The Sport Psychologist. 17, 16-34.

65) WJBL(バスケットボール女子日本リーグ機構)公式サイト: http://www.wjbl.org/pc_index_html

66) 吉井四郎. (1960). バスケットボール勝敗因の研究(一). 野投試投数増減に関するプレー. 一橋大學研究年報. 人文科学自然科学研究, 2, 223-264.

67) 全日本大学バスケットボール連盟: http://www.jubf.jp/

謝辞

本論文を作成するにあたり、指導教員の濱野光之先生には入学の手続きから日頃の研究指導において幅広い御指導・御助言を賜りましたこと、厚くお礼申し上げます。主査の加納実先生には、主査として厳しく丁寧な御指導を、副査の町田萌先生には、研究計画書の書き方からデータ分析、論文指導全般において、厳しく、辛抱強い、熱心な御指導・御助言を賜りましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

そして、インタビューの御協力を快く引き受けて下さった、各大学バスケットボールの指導者の皆様をはじめ、高校の成澤先生、小林先生、早稲田大学大学院の前田君に深く感謝の意を申し上げます。また、順天堂大学の長登健先生をはじめ、教職員・事務職員の皆さん、さくら・本郷キャンパスの院生の皆さんに深く感謝致します。さらに、本稿を執筆する大きなきっかけを創って下さった Dream7 の西田辰巳さんと第8回アメリカコーチ研修会 Coach Tornadoes に参加した皆さんに厚く御礼申し上げます。

最後に、大学院進学を受け入れ、支え続けてくれた両親や家族、周りの皆さんに心から感謝致します。本当にありがとうございました。

英文要約

Abstract

Coaching Philosophy and its Developmental Process of College Basketball Coaches

Hidenori SHIBUSAWA

Coaching behaviors have various influences on athletes' performance and psychological growth (e.g., Gilbert & Trudel, 2004; Kitamura et al, 2005). Coaching philosophy is the basic belief that underlines coach behaviors in relationships with athletes (Vealey, 2005). Thus, it is important for coaches to establish coaching philosophy in their practice (Marten, 2012). However, few study have examined coaching philosophy of basketball coaches and its formation processes. Based on Horn's (2008) working model of coaching effectiveness, the purpose of the study was to examine coaching philosophy and its development among college basketball coaches. In-depth, semi-structured interviews were conducted with four college basketball coaches (male: n=3, female: n=1; mean age = 52.3 year-old). Inductive analyses (Patton, 2002) were employed while considering association with Horn's working model. The results showed that coaching philosophy of college basketball coaches consists of (1) coaching methods, (2) coaching perspectives, (3) skills and characteristics required for coaches, (4) skills and characteristics required for players, (5) relationship with players, (6) perspectives on team, and (7) tactics and strategies. As the factors that affect the development of their coaching philosophy, (1) role model, (2) experiences, (3) individual factors, and (4) environment factors were identified. Results indicate that coaching philosophy of college basketball coaches concerns both performance enhancement and character development of players. Results also suggest that development of coaching philosophy is a process involving multiple factors. Implications of the study findings for coaching education programs are discussed.

添付資料 A
研究トピックの関心や経緯と背景に関する記述

1) 指導哲学に関心を持った動機

元々、研究に関心があった分野はトップレベルのコーチング行動についてであった。トップレベルの指導にあたるコーチは、選手のパフォーマンスをいかにして発揮させているのか。特に、トップレベルのコーチは選手にどのような声かけ(褒めているのか・叱っているのか)を行っているのかに関心があった。特にバスケットボール界では体罰の問題が浮上していた時期でもあり、優秀な指導者のコーチング行動(声かけ)の実態を明らかにすることは、指導者養成の観点からも意義があると考えたためである。しかしながら、指導者が発する言葉は例えていうなら、川の流域であり、あらゆる状況の違いによって、右にも左にも左右してしまう性質を持っているため、その流域を調べるのではなく、川の水源(指導哲学)を明らかにすることが、コーチングの本質に迫ることに繋がるのではないかと考えた。

2) 指導哲学に関心を持った経緯

2014年2月初旬にDream7という団体が主催したコーチ研修会に参加した。この研修会は、アメリカのシアトルとポートランドを拠点に、地域の小学校・中学校・高校・大学・プロまでのゲームや練習を見学し、約10日間にわたってシアトルにあるドミトリーで共同生活をするという希望参加型の研修会である。この研修会は、バスケットボールのみならず、アメリカで成功した日本人経営者や大手メーカーと直接接触し、社内ツアーや工場見学など、その組織の内面を知るだけでなく、紆余曲折を経ながら築き上げられていった会社の理念や人生哲学を内部の人間から直接聞けるところに特徴がある。アメリカンドリームを叶えるために小さなところから始めた一つ一つの積み重ねが、今では多くの人に支持や信頼を得るようになったのである。それぞれの成功者に共通していたものは、行動の原点となる明確な信念と洗練された人生哲学であった。そして、それはアメリカで素晴らしい選手を育てているバスケットボール指導者にも共通していた。一定の成果を得ても、おごることなく、謙虚に、どの人に対しても平等に、情熱を持って、自身の原点となる信念や哲学に基づいて実行し続ける力。アメリカという大きな国で成功を収めた指導者や経営者の本質的な生き方に感銘を受けたことで、日本のバスケットボール指導者の現状を知る必然性を感じたのである。なぜならば、日本のバスケットボールが世界で戦うためには、指導者自身が世

界に目を向け、世界基準で独自バスケットボールの理論や哲学を構築していく必要があると実感したからである。

3) この研究から期待される知見

今回、研究の対象となる指導者は、トップレベルのプロ選手を多く輩出しているばかりでなく、日本を代表する選手を育成してきた実績を持つ指導者である。また、ユニバーシアード代表監督の経験や自身が日本代表選手として世界を舞台に戦っていた経験、また、海外に渡ってコーチングを学んだ経験など国内にとどまらず、世界のバスケットボールを肌で感じた過程を経て、現在のバスケットボール哲学を構築してきた可能性が考えられる。そのため、選手を指導するにあたって、世界で通用するような選手をいかに育てていくか、また、世界基準でバスケットボールを捉え、日本のバスケットボールが世界で通用するための明確なビジョンを持っていることが予想される。従って、本研究によって、トップレベルの大学バスケットボール指導者の指導哲学と、その指導哲学の形成過程を明らかにすることは、今後、日本が世界で戦うための方向性や指針を提言できる可能性が考えられる。

添付資料 B

インタビューガイド

インタビューガイド(Interviews　guide)

1. 基本情報

1) 年齢

2) 最終指導チームの指導歴

3) 生涯における指導歴

4) バスケットボールの競技歴

5) 最終競技カテゴリー

6) 現役時代のポジション

7) 指導実績に関して（NBL・bj・WJBL 選手、日本代表選手の輩出の有無など）

2. ラポートの形成(rapport-building)に関する質問

1) バスケットボールの指導を始めたきっかけについて教えてください。

2) これまで指導をしてきて感動したことや嬉しかった出来事について教えてください。

3) バスケットボールの魅力はどこにあると思いますか?

3. 基幹的質問(main question)

1) これまでのご経験から、選手を指導していく上で、どのようなことが大切だとお考えですか?

2) 現在の指導者としての信念や考え方は、どのように形成されていきましたか？

4. 追跡的質問(follow-up question)

1) どのような選手を育てることを目標にしていますか?

2) 選手を育てていく上で、他に大切にされてきたはありますか?

3) 理想とする指導者像はどのような人物ですか?

4) 選手とコミュニケーションを図る上で大切にされていることはありますか?

5) すべて準備する姿勢とは、具体的にどういうことでしょうか?

5. 探索的質問(probes question)

1) ディフェンスを徹底する上で具体的にどのようなことが大切だとお考えです?

2) 具体的には、どのような経験(出来事 etc)が影響したと思いますか?

3) 学業面に関してはどのようなことを大切にされていますか?

4) 理想の指導者となるために、具体的に取り組んでいることは何ですか?

5) どのような事がきっかけで、世界に通用する選手を育てたいと思うようになったのですか?

添付資料 C

コンタクトサマリー

Contact Summary Form

対象者の名前 _____

対象者についての情報: _____

インタビューの日時場所: _____

インタビューの開始・終了時間: _____

1. 研究対象者が述べた指導哲学の要約

2. このインタビューで印象に残ったテーマや質問項目は何でしたか?

3. インタビューを通して、研究対象者の振る舞い(トーン,表現,ボディーランゲージなど)に関して何か印象に残ったことはありましたか?

4. 新たに質問項目として追加した方が良いもの、もしくは削除した方が良いものはありましたか?

5. その他、インタビューや研究対象者に関してどんな感想がありましたか?